

# 友 進 遺 跡

——国営畑地帯総合土地改良パイロット事業の内  
鹿追地区 A～14号道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和 56 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

# 友 進 遺 跡

——国営畑地帯総合土地改良パイロット事業の内  
鹿追地区 A～14号道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和 56 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

## 序

本書は、国営畑地帯総合土地改良パイロット事業に伴い、昭和56年度に実施した河東郡音更町友進遺跡の調査結果を収録したものであります。

音更町は、十勝川を隔てて帯広市の北隣に位置しています。北海道の屋根ともいわれる大雪山および日高山系の水を集める十勝川によって形成され、やや起伏に富んだ十勝平野は、全国でも屈指の畑作地帯であり、雑穀、とりわけ豆類の主産地であります。国際的な食糧危機が叫ばれ、国内においても穀物自給率の低下が問題視されている昨今、国営畑総事業によせる期待は大なるものがあります。

今次の事前発掘調査は、鹿追地区土地改良事業のうち、農道工事に係るもので、道路計画線が遺跡の縁辺にあたっていたため、遺跡の全容を把握するには至らず、かつ、出土品も必ずしも豊富ではありませんが、資料整備の比較的遅れている当該地域の先史時代文化の解明に大きな手懸りを与える資料と申せましょう。本報告書が、学術関係者はもとより、広く一般の人々にも活用されますとともに文化財保護思想の啓蒙普及に役立つことを願うものであります。

業務の遂行にあたって、北海道教育委員会のご指導ならびに北海道開発局帯広開発建設部の深いご理解をいただいたことを記して謝意を表しますとともに、音更町教育委員会はじめご協力いただいた関係各位にお礼申しあげる次第であります。

昭和 57 年 3 月

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 浅井 理一郎

# 目 次

I. 調査の概要	5
調査要項	5
調査体制	5
遺跡の位置と環境	8
土層	8
調査の方法	9
遺構	9
遺物	11
II. 出土遺物	12
土器	12
石器	19

写真図版

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	6
第2図 調査地区および遺構の配置	7
第3図 標準的な土層	8
第4図 P-1 および出土遺物	9
第5図 P-2 および出土遺物	10
第6図 包含層出土の土器 (II群3類)	13
第7図 包含層出土の土器 (I群)	14
第8図 包含層出土の土器 (I群)	15
第9図 包含層出土の土器 (II群)	16
第10図 包含層出土の土器 (II群・III群)	17
第11図 包含層出土の石器(1)	20
第12図 包含層出土の石器(2)	21
第13図 包含層出土の石器(3)	22
第14図 包含層出土の石器(4)	23
第15図 包含層出土の石器(5)	24
第16図 ポイント破損部位および断面模式図	27

# I 調査の概要

この報告書は、国営畑地帯総合土地改良パイロット事業のうち道路工事に先立って、音更町友進地区において実施した埋蔵文化財発掘調査の結果を収録したものである。

## 調査要項

事業名：国営畑地帯総合土地改良パイロット事業の内鹿追地区A～14号道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：北海道開発局帯広開発建設部

事業受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査期間：昭和56年8月20日～昭和57年3月25日

遺跡名：友進遺跡（道教委登載No.L-02-27）

所在地：北海道河東郡音更町字西中音更北12線

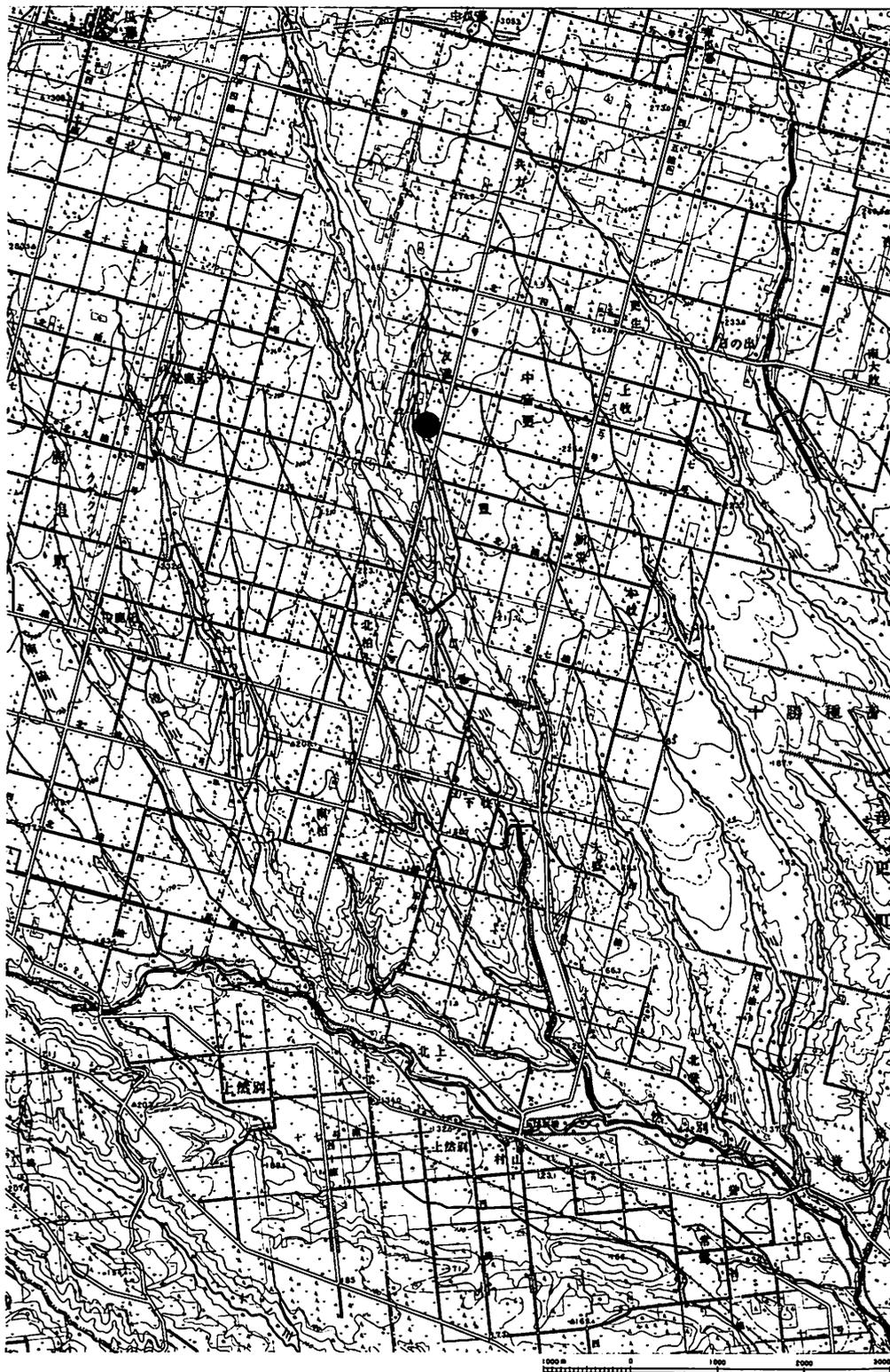
調査面積：2,017.5 m<sup>2</sup>

## 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター	理事長	浅井理一郎
	業務部長	馬場 治夫
	調査部長	藤本 英夫
	業務部管理課長	小山内光之
	同管理課主事	佐川 俊一
	同経理課長	梅沢 祥真
	同経理課主事	菅野 聡
	同嘱託	石井 義男
	調査部調査第二班長	森田 知忠
	同調査第二班文化財保護主事	矢吹 俊男（発掘担当者）
	同	工藤 研治
	（調査補助員）	瀬川 拓郎

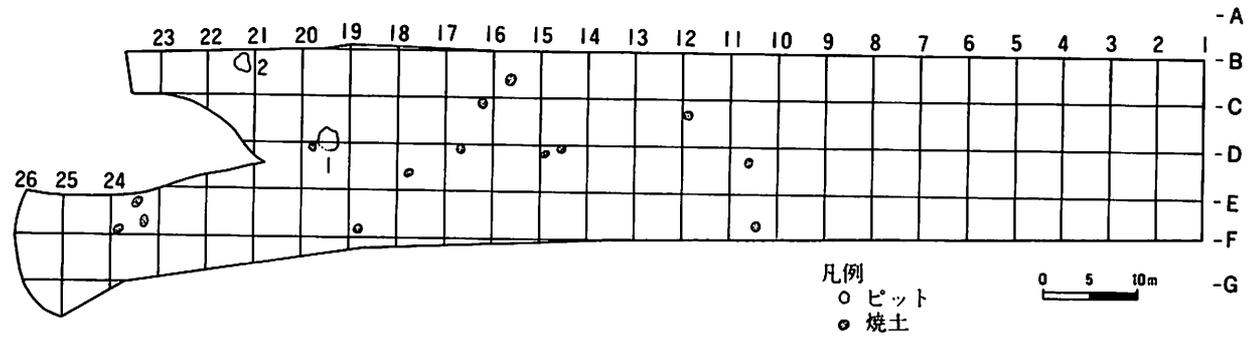
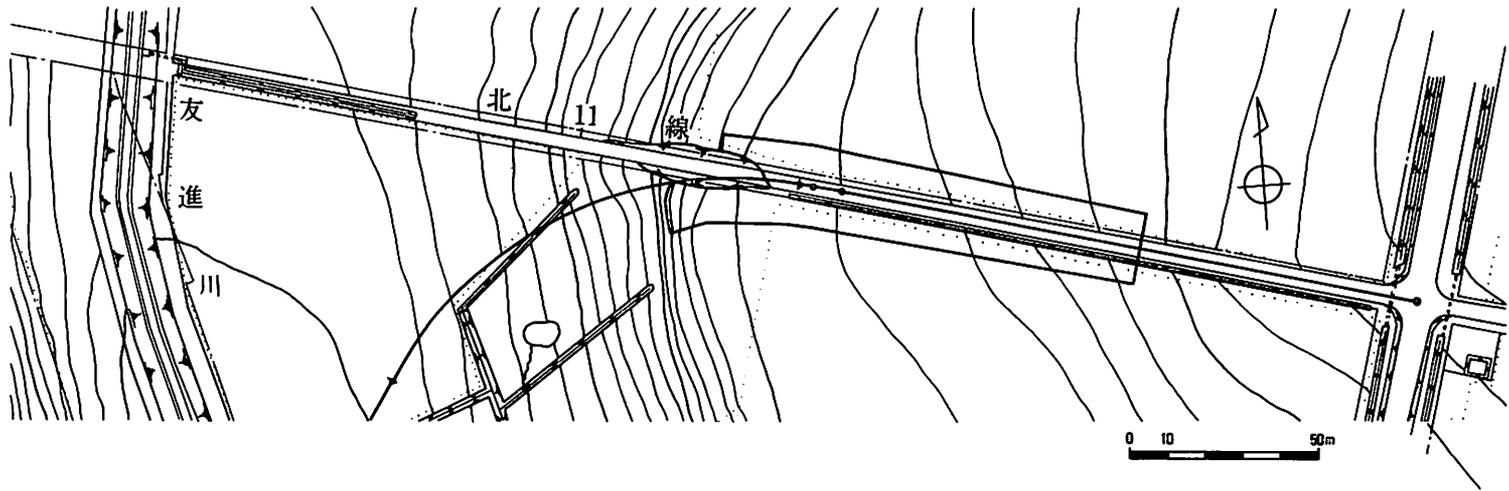
なお、この発掘調査の遂行にあたって、下記の機関および人びとのご指導ならびにご協力をいただいた、記して感謝申し上げます。

北海道教育委員会、音更町教育委員会、鹿追町教育委員会、高橋建設(株)、中央測研(株)、石橋次雄、沢四郎、菅訓章、豊原熙司（敬称略）



第1図 遺跡の位置 (●印)

この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「中土郷」を複製したものである。



第 2 図 調査地区および遺構の配置

## 遺跡の位置および環境

十勝平野は、西を日高山脈に、北を石狩山地の十勝、大雪、<sup>しかりべつ</sup>然別などの火山群に、東を十勝と釧路の支庁境の白糠、<sup>しらぬか とよころ</sup>豊頃丘陵にかこまれ、南は太平洋に面する面積が3,600 km<sup>2</sup>におよぶ広大な平野である。年間を通じて比較的冷涼であるが、内陸部では、夏季高温湿潤、冬季低温乾燥で、沿岸部では海霧の影響で冷湿な気候となっている。日照時間は、年間2200時間前後で、夏にはやや少なく、晩秋から春にかけて多くなる。雨量は年間を通じて少ないが、季節的には夏から秋にかけてやや多く、冬は晴天の日が続き、内陸部での降雪は少ない。

友進遺跡は、十勝平野の北西部、<sup>うりまき</sup>瓜幕台地のほぼ中央部の畑作地帯にある。北部十勝地域には、十勝川支流の各河川によって開析され、標高500~150 m前後で、北北西から南南東に延びる、ほぼ並列する台地がよく発達している。瓜幕台地はこの中央部にあたる。

遺跡は、北方の東ヌブカウシ山の南西麓付近を水源とする瓜幕川に北方から注す小支流・友進川（瓜幕第5幹線明渠排水）の左岸段丘上に立地している。標高は230~235 m、友進川との比高は、15 m前後である。段丘崖下には湧水があり、現在も相当量の水が湧き出している（第1図および第2図）。

遺跡がのる段丘は、北東から南西方向へゆるやかに傾斜している。発掘区はこの包蔵地の縁を東西につらぬく農道下および畑地内の、長さ125 m、最大幅24 mの細長い部分である。

発掘区付近の表面踏査を行なったところ、発掘区の北側での遺物の散布はあまり見られず、南側、とくに台地縁部で多く見られた。

本地域における遺跡の分布調査は積極的に行なわれていないのが現状で、パンケピパウシ川、ベンケピパウシ川、然別川の両岸で小数の縄文時代中期末を主体とする遺跡が知られているが、瓜幕川以東、音更川に至る台地上には本遺跡以外には発見されていない。

## 土層

遺跡で観察された標準的な土層は以下のとおりである。

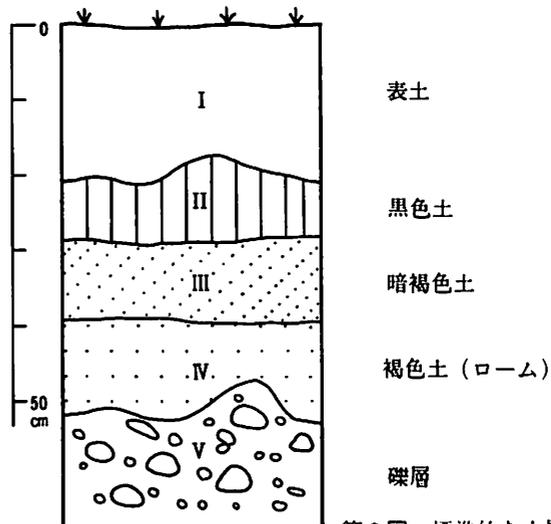
第I層：表土、耕作面および農道面にあたる。耕作や農道付設の際に、相当な攪乱をうけており、遺物（土器、フレイク、チップなど）が散布している。

第II層：黒色土、遺物包含層。

第III層：暗褐色土、層中に褐色土粒を含んでいる。遺物包含層。

第IV層：褐色土（ローム）、遺物包含層。用途不明のピットおよび焼土がこの面で検出されている。

第V層：礫層、無遺物層。



第3図 標準的な土層

耕作地以外の部分では、上記の5層に分けることができたが、発掘区の大部分は、大型農機具による深層までの耕耘、農道付設の際の掘りおこし、客土、さらに農道の両縁には排水溝が設けられたりしており、第IV層上面まで攪乱を受けている。

### 調査の方法

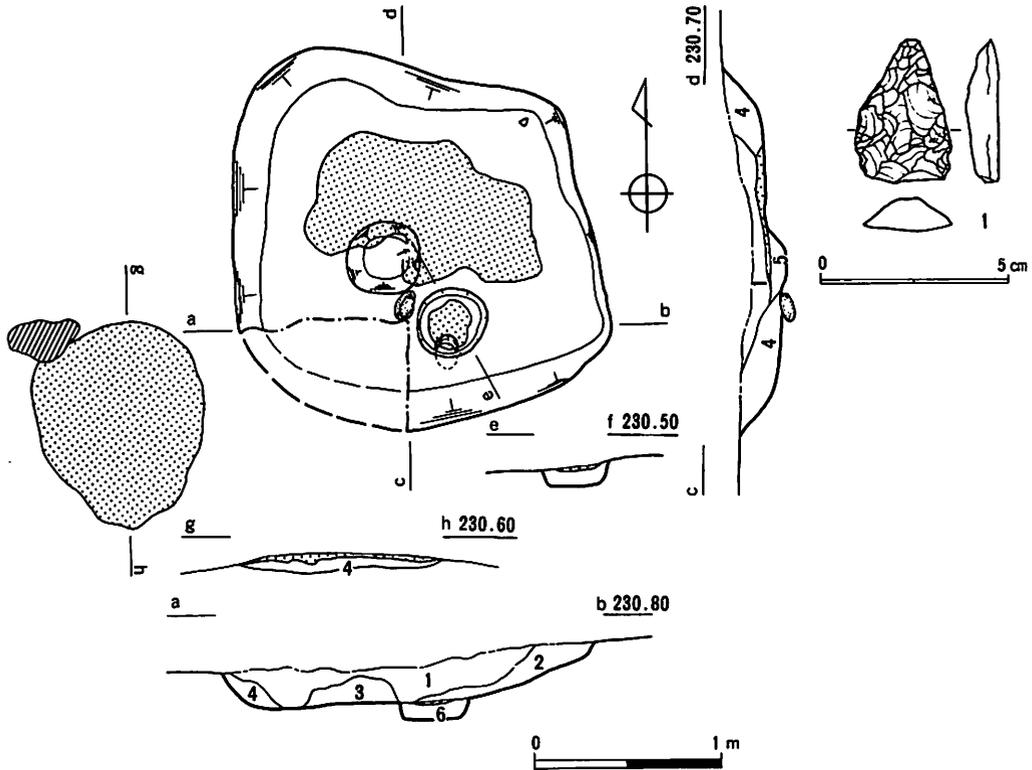
発掘区は、道路工事に設けられたセンター杭を利用して設定し、区域内に5×5mのメッシュをかけた。各グリッドには、東から西に1～26、北から南にA～Gと呼称した(第2図)。

調査にあたっては、まず、遺構、遺物の分布および土層の状態を把握するため、全体にテストピットを掘開した。その結果、12ラインから東までは遺物の出土がきわめて少ないことがわかったので、第IV層上面までの調査には重機を利用した。

### 遺構

検出された遺構は、用途不明のピット2か所と、焼土14か所で、それらの分布は発掘区の西半にかぎられている。(第2図)

P-1(第4図)：発掘区の西側、C-19とD-19にまたがって検出された。確認面は第IV層上面であるが、掘りこみ面は不明。不整形で、確認された深さは浅く、壁はゆるやかに立ち上る。覆土は、第1層：微細な炭片を多く含む暗黄灰色土、第2層：微細な炭片を含む黄褐色土、第3層：ロームブロック、第4層：汚れたローム、第5層：焼土・炭片を含む褐色土、第6層：

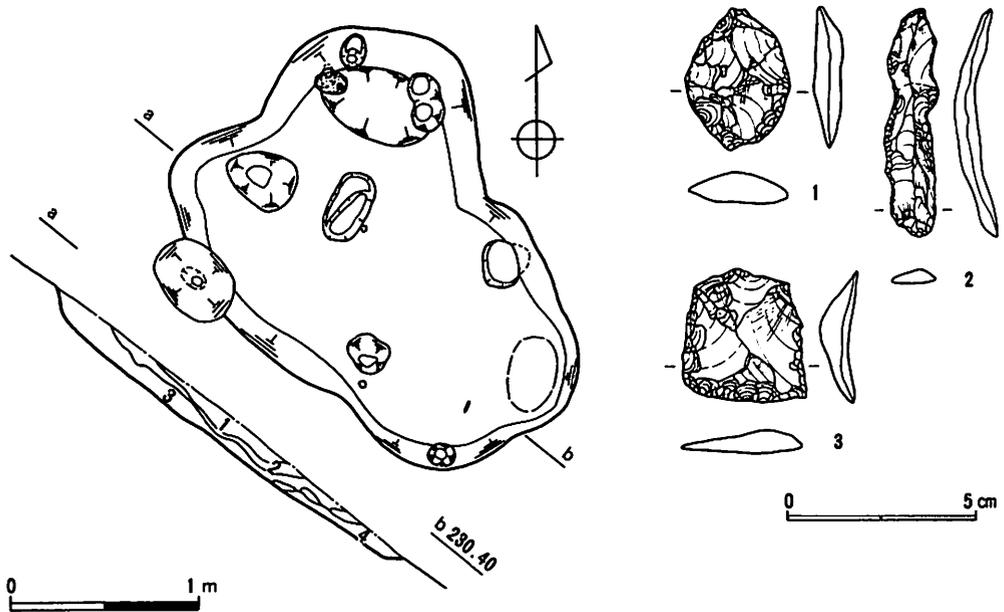


第4図 P-1 および出土遺物

汚れたボロボロのローム、第7層：焼土をわずかに含むロームである。床から小ピットが検出されたが本址に伴うかどうか不明である。床の一部は炭化物混りの焼土で覆われている。床面からスクレイパーと礫が出土したが、礫には加工痕が認められないので図示しなかった。第4図1はスクレイパーで一部破損している。両縁辺には部分的ではあるが細かな加工が施されている。重さ8g、黒曜石製。

P-2 (第5図)：B-21の第IV層上面で確認された。掘りこみ面は不明。不整形で確認面からの深さは浅く、壁はゆるやかに立ち上る。床面は一部に凹凸があるものの、概して平坦である。覆土は、第1層：ローム粒を含む暗褐色土、第2層：若干のローム粒を含む黒色土、第3層：黄褐色土、第4層：黒色土粒混りの黄褐色土。壁ぎわおよび床から掘り込みの浅い小ピットが検出されているが本址に伴うものかどうか不明である。覆土および床面から遺物が出土したが図示し得たのは3点だけで、いずれも床面出土のものである(第5図1~3)。3点ともスクレイパーである。1は丸味をおびたもので、中央部から下端にかけての縁辺に細かな加工がみられる。重さは7g。2は縦長の剥片の縁辺に加工のあるもので、とくに器体中央部(図の左側)には細かな加工が施されている。重量は4g。3は三辺に細かな加工が加えられたもので、背面には加工はない。重量は8g。1~3とも黒曜石製である。

焼土：10ラインから24ラインにはさまれた地区から検出された。すべて第IV層上面で確認されているが、深土耕作による攪乱が第IV層上面にまで及んでおり、この焼土検出のレベルが必ずしも当時の生活面であるとは言いがたい。石囲みなどの施設はもたないいわゆる地床炉と考えられる。焼土に伴う遺物は皆無で、時期を決定することはできない。また、それぞれの焼土が同一時期に形成されたものかどうか不明である。



第5図 P-2および出土遺物

## 遺物

遺構以外から出土した遺物には土器、石器(剥片石器、礫石器)、フレイク・チップ類がある。総数 25,775 点。内訳は土器 953 点、剥片石器 486 点、礫石器 6 点、フレイク・チップ 24,330 点で、フレイク・チップは全体の約 94% を占める。発掘区の西半、とくに 18 ラインから 22 ラインにかけて遺物の分布は密になる。とくに、19 ラインの各グリッドでの出土量がもっとも多くなり、なかでもフレイク・チップの集中出土がみられた。12 ライン以東での遺物の分布は稀薄で、全出土量の 0.1% にすぎない。

土器は、縄文時代早期の大楽毛式類似の土器、中期の北筒Ⅱ式、Ⅲ式、Ⅴ式土器、および晩期に比定されるものが出土している。早期の土器は主として 16 ラインと 19 ラインの間に分布しており、大半が第Ⅳ層上部から出土している。中期の土器は、19 ラインと 24 ラインの間に分布していたが、発掘区の大部分が攪乱を受けており、それぞれの型式の土器を層位的にとらえることはできなかった。晩期に比定される土器はわずか 1 点のみであった。

石器には、石鏃、ポイント、スクレイパー、ドリル、ナイフ、すり石、石皿、たたき石、砥石などがある。なかでもポイントの出土が多い。ポイントは、そのほとんどが折れており、その使用目的、使用状態を考えるうえで興味深い。

今回の調査のかぎりでは、友進遺跡は、遺物の出土状態、とりわけフレイク・チップが多いこと、湧水が近くにあることなどから、石器の製作所、獲物の解体作業場、また一時的な居住地であったことが推定される。しかし、この調査結果から遺跡の全貌を把握することはなほだ困難であり、検出された焼土、ピットなどとの関係が明確でなく、かつ、発掘区の大部分が攪乱を受けていることもあって、遺跡の性格を論ずるにはまだ問題がある。

なお、本遺跡の出土遺物および記録類は、整理終了後、音更町教育委員会において保管する予定である。(矢吹俊男・工藤研治)

## II 出土遺物

### 土器

出土量は少ないが、復元できた個体と、口縁部、底部の破片のほとんどを図示した。胴部破片については、特徴的なものを選択した。今回出土した土器はその特徴によって、いくつかに分類できるが、便宜的に、大きくⅠ～Ⅲ群に分け、以下記述する。

#### Ⅰ群（第7・8図）

縄文時代早期の土器を本群とする。本群は大きく二つに分類される。

##### 1類（1～24・26～42）

比較的薄手の土器で、条痕文が施されたもの（1～18・24・26～42）と、沈線や刺突が施されたもの（19～23）がある。

条痕文が施された土器は、1～18に示した口縁部をみると、ゆるやかな波状をなすもの、小突起をもつものがあり、また、隆帯が付けられたもの（1～4）、口唇断面が角形になるもの（5～9）、丸みをもつもの（11～17）などの変化がある。11には口唇上に刻み目が付けられる。3の胎土には、砂粒が含まれていて脆くなっているが、他は緻密で焼成も良く、褐色あるいは暗褐色を呈する。条痕は、26・34には、内外面共に顕著であるが、他は、あまり明瞭ではない。4・14・15・17・27～29には幅3～4mmの浅い条痕が施されているが、指ですり消されたようになっている。14は復元実測した小突起をもつ小型の浅鉢と思われる土器で、推定口径9cm、現存高3.5cmを計る。6・7・17には内面に幅4mm程の整った条痕が施されているが、表面は不明瞭である。7は、表面に内面と同じ条痕が施された後、すり消されたものである。本類に含めた条痕文土器には、貝殻条痕文と認められるものはない。30～42は底部で、いずれも平底である。32のように底が強く張り出すもの、30・33・36のように、軽くくびれるもの、34・35・37～40・42のように直線的にのびるものがある。18は山形の突起をもち、口唇上に刻み目が付けられた土器で、幅1cm程の縦方向のすり消しがある。本類に含めるには疑問が残るが、便宜的にここに含めておく。19～23の沈線や刺突が加えられる土器は、条痕文が施された土器に比べてやや薄手で、明るい褐色を呈する。胎土は緻密で、焼きはあまり良くない。19・22・23は、3mm程の間隔をあけて、山形と、断続する平行沈線が施される。20・21には密な沈線が引かれ、21にはさらに、沈線で区画された中に刺突が加えられる。本類に含めた土器のうち、条痕文をもつものは、釧路地方の大楽毛式に類似する点が多い。沈線や刺突が施された土器は、大楽毛式のなかでとらえられるのかどうか判然としないが、胎土、色調、焼成等から、条痕文が施されたものと区別するのは困難である。

##### 2類（25・43・44）

明るい褐色を呈する厚手の土器である。43は、胎土に砂粒を少量含んでいる。44には、表面に指頭による整形痕がみられ、胎土に繊維を含む。1類とは明らかに区別できるが、資料が少な

いため、ここで、にわかに類例を求めるのは難しい。25は、かすかに条痕文が認められるもので、胎土に繊維を含んだ脆い土器である。1類に含まれるものかもしれないが、仮りに、ここに含める。

## II群 (第6・9・10図)

いわゆる北筒式土器である。

### 1類 (第9図45~47)

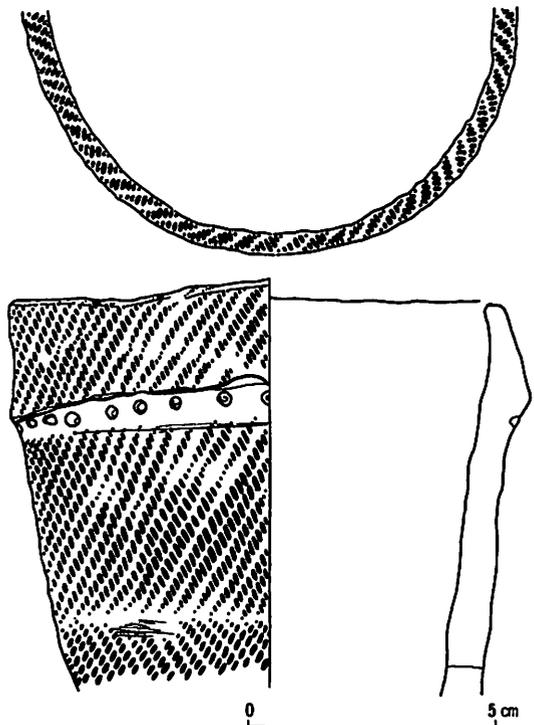
45は胎土に繊維を含み、砂粒を混える土器で、口縁部には、突瘤文のほかに、右斜めから鋭く突いた刺突がある。46はあやくり文のあるもので、胎土に少し繊維を含む。47は胎土に多量の繊維を含む土器で、突瘤文が施されている。これらの土器は、トコロ6類(駒井編1964)に類似するものである。45のように、口縁部に斜めから突いた刺突が施される例は、道央部で多く知られている。

### 2類 (48~50)

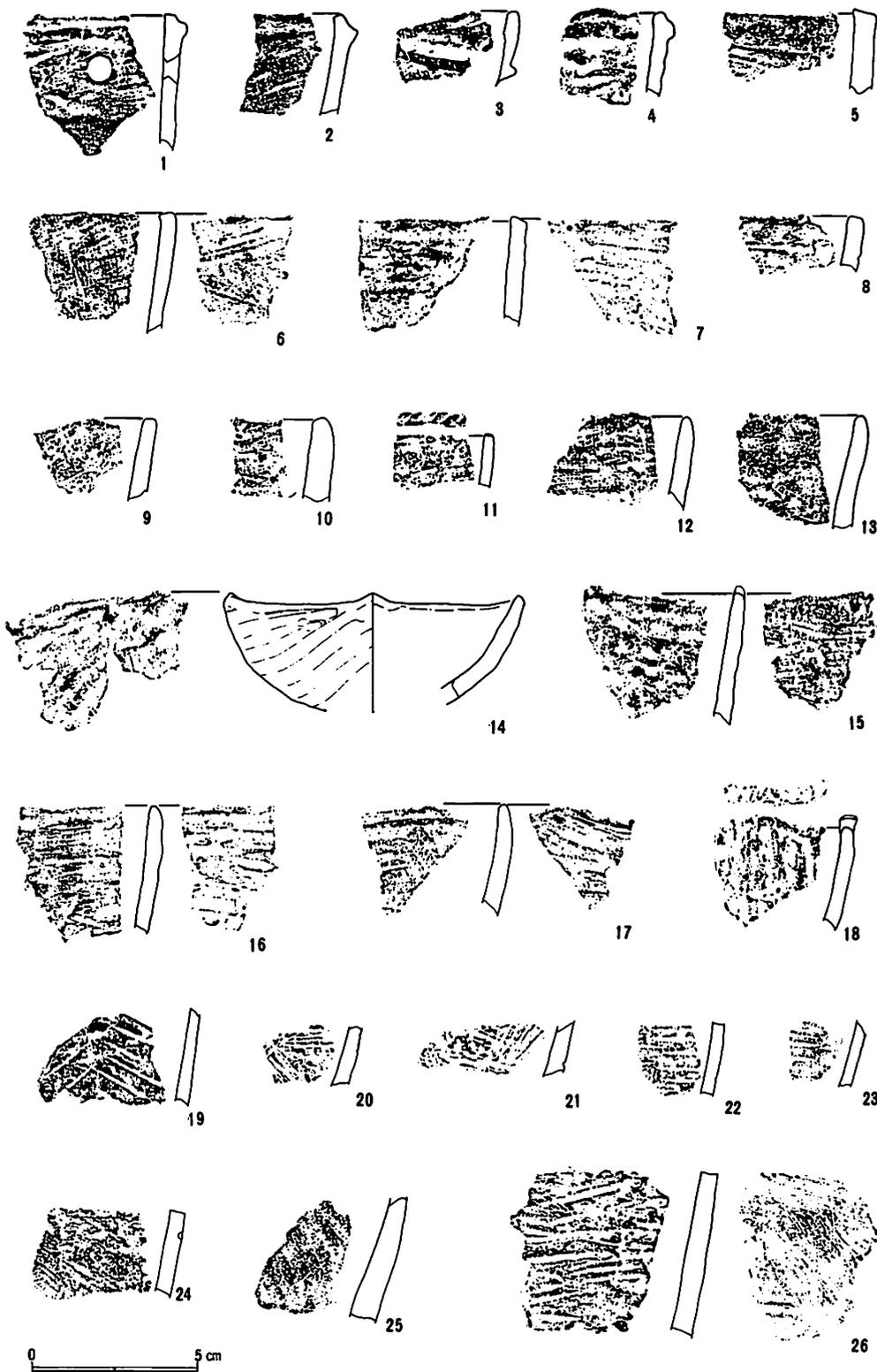
口縁部の肥厚帯上に縦方向の沈線が施されたもので、いずれも、口唇上にも縄文が施される。48は口縁部内面にも縄文が施されたもので、胎土に繊維を含む。直径約15mm程の中空の工具による刺突があり、内面に瘤をつくる。49は比較的薄手の土器で、胎土に繊維を含むが、焼成は良い。肥厚帯の直下に刺突があるが、内面に瘤は形成されない。口唇上には、縄文を施した後、約2mmの幅をもつ刺突が加えられている。50の肥厚帯には低い棒状突起が付き、肥厚帯の下に直径13mmの円形の刺突が施され、内面に瘤をつくる。刺突の断面は丸くなっており、中空の工具を用いたものではない。地文には結束のない羽状縄文が施されている。胎土に多量の砂粒と少量の繊維を含む。本類に含めた土器は、釧路地方でいう北筒II式(河野・澤1962)の一部をなすものであり、トコロ5類(駒井編1964)に類似する。ただ、トコロ5類は、胎土に繊維を含まないものと理解されており、胎土に繊維を含む本類の場合、いま一度、検討の必要がある。

### 3類 (第6図、第9図51~56)

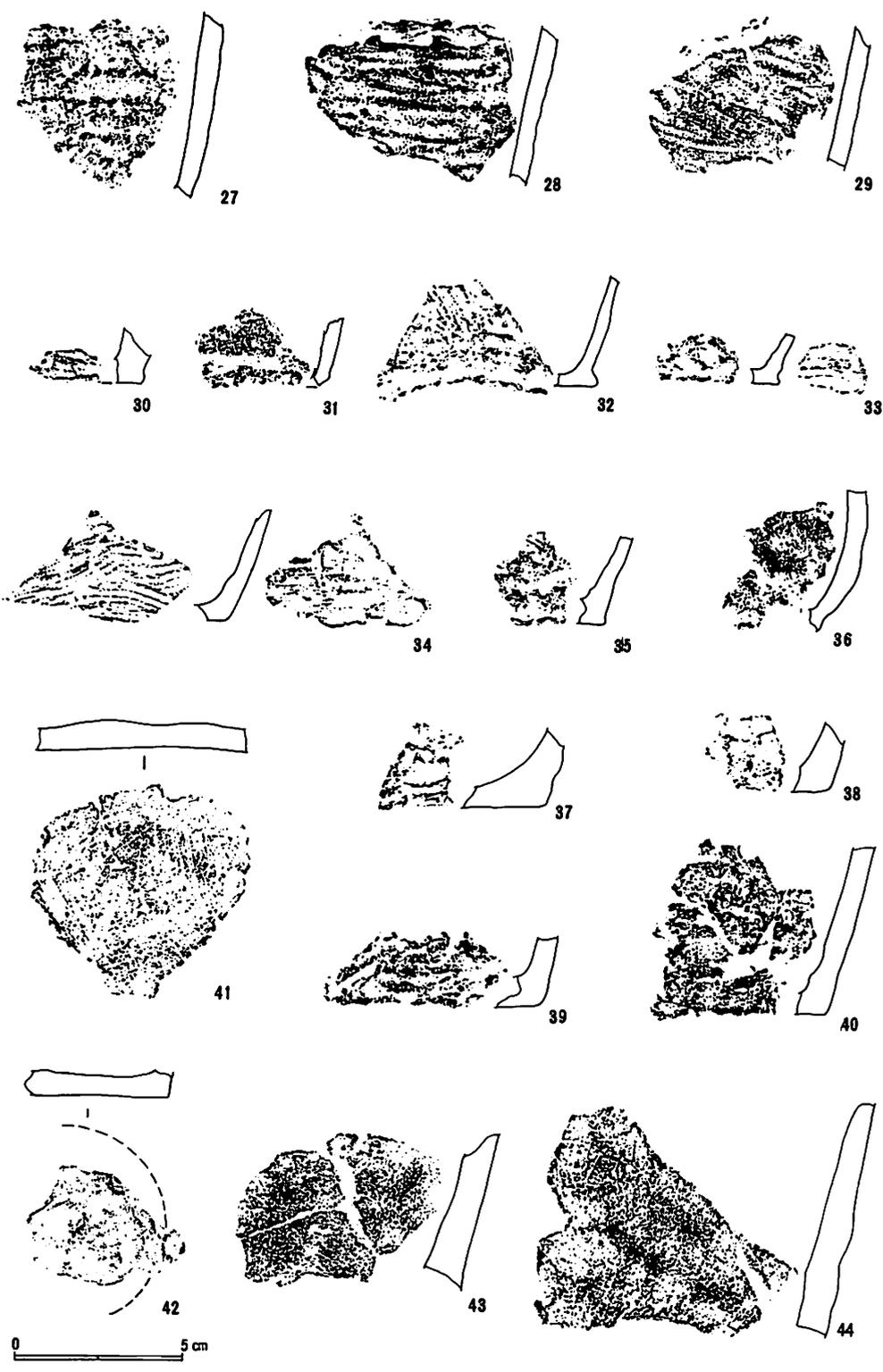
口縁部に肥厚帯をもち、口唇断面が角形になるもので、単節の縄文が施されたものである。肥厚帯直下には、円形の刺突があり、内面に瘤をつくるものと、そうでないものがある。第6図に示したものは、当遺跡で出土した土器のうち、復元できた唯一のもので、口径18.5cm、現存高14.5cmを



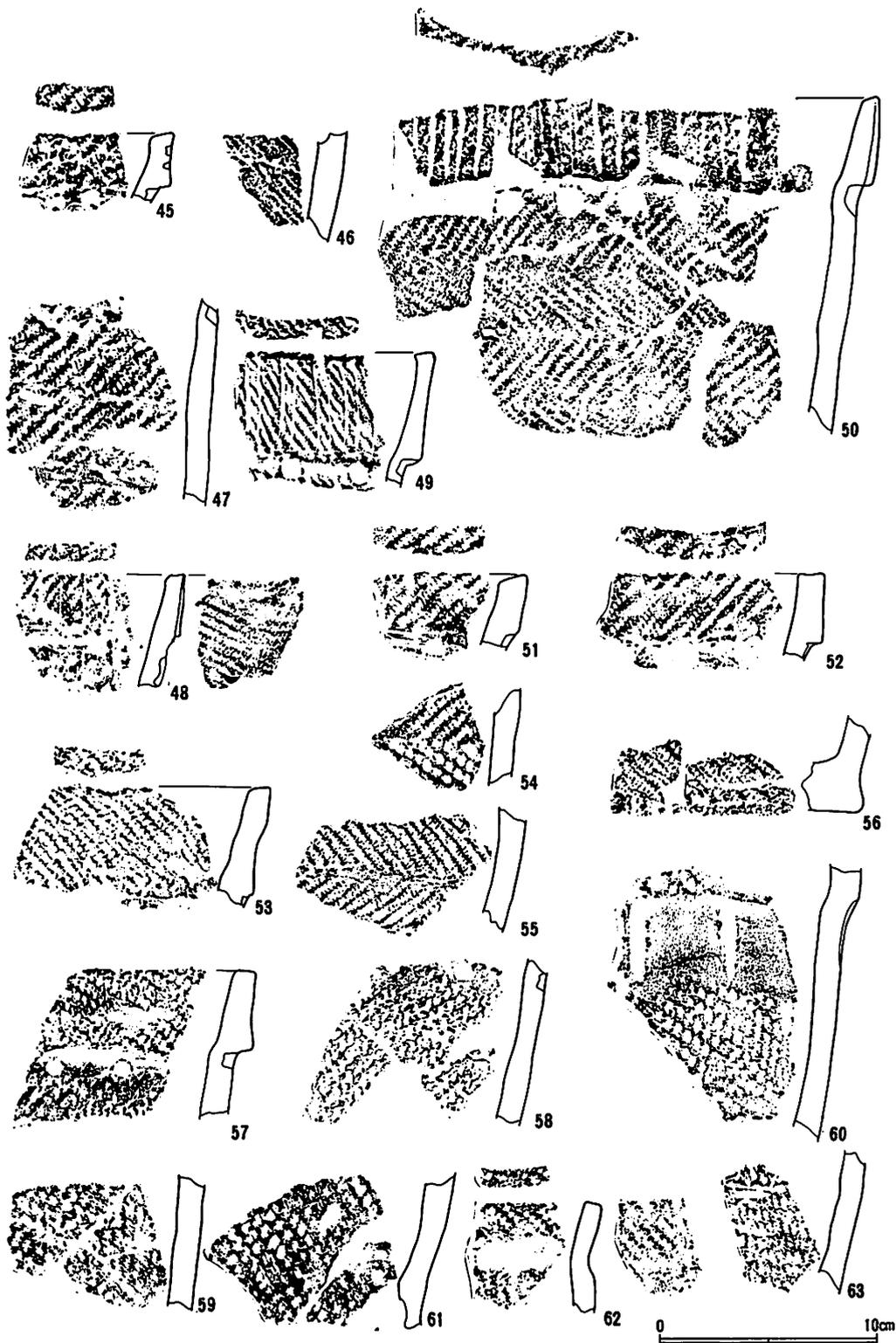
第6図 包含層出土の土器 (II群3類)



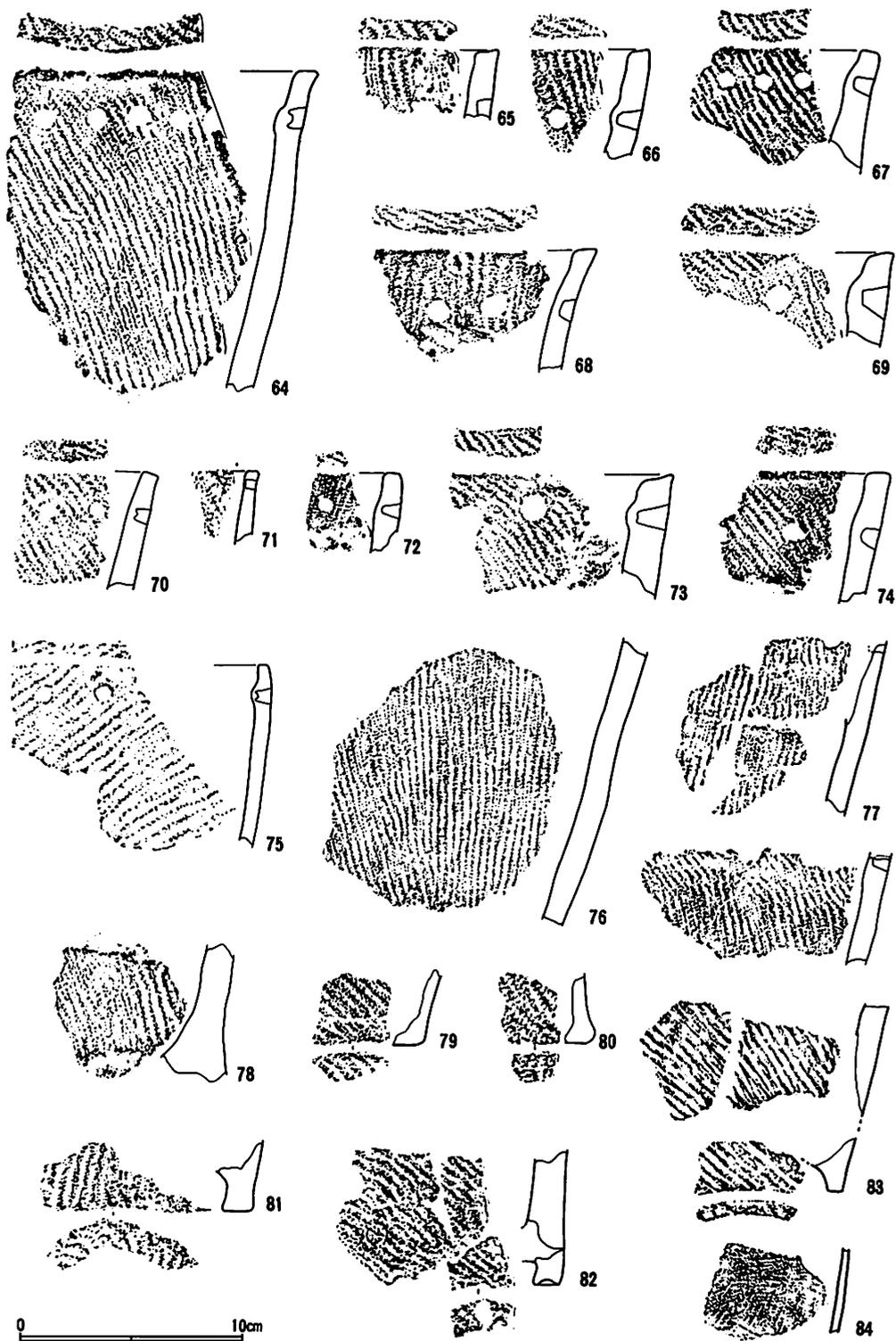
第7図 包含層出土の土器 (I群)



第8図 包含層出土の土器（I群）



第9図 包含層出土の土器（II群）



第10図 包含層出土の土器 (II群・III群)

計る。肥厚帯の下を2～2.5cmの幅ですり消し、その後、直径約5mmの細い刺突を加えている。刺突は浅く、内面に瘤をつくらない。地文として、RLとLRの原体を用いた羽状縄文が施されている。胎土に少量の繊維を含む。53も同様、肥厚帯の下に小さく浅い刺突が施されている。51・52は同一個体に属する破片で、幅の狭い肥厚帯をもち、その下を半截竹管状の工具ですり消した後、直径約15mmの刺突が加えられている。54、55は羽状縄文が施されたもので、55には繊維が含まれている。56は斜行縄文の施された底部破片で、底がわずかに張り出す。

#### 4類 (57～59)

複節の縄文が施されたものである。57、58は同一個体と思われるもので、53は口唇断面が角形を呈し、肥厚帯の下に幅の狭い無文帯を設け、突瘤文が施される。60はやや幅広の無文帯の上に、下から突き上げた刺突が施されている。59は複節縄文が施された胴部破片である。

#### 5類 (60・61)

胎土に多量の砂粒を含み複節の縄文が施される土器である。60はやや幅の広い無文帯に、下から突き上げた刺突が施される。

#### 6類 (62)

胎土に砂粒を含み、単節の斜行縄文が施されたもので、口唇上、口縁部内面にも縄文が施されている。口唇断面は角形を呈し、口縁部直下で、ゆるやかに肩が張る。肩の上は幅の狭い無文帯となっている。

3～5類は、北筒Ⅲ式(河野・澤1962)に含まれるもので、そのうち、5類としたものは、羅臼式(駒井編1964)に比定される。6類は胎土に砂粒を含み、口縁部に無文帯をもつなど、当遺跡で出土した土器のなかでは、5類に近いが、いずれに伴うものか判然としない。

#### 7類 (第10図64～83)

平縁で、口唇断面は角形を呈し、口縁部に、外面から突いた顕著な突瘤文が施されている。突瘤文を施す際、64・70・75は中空の工具、65～69・71～74は棒状の工具を用いて突いている。64～75は口縁部破片で、口唇上にも縄文がみられる。68は地文に縦走する縄文が施されるが、他は斜行縄文である。71・75は薄手で他と趣きを異にする。76～78は胴部破片である。80～83は底部で、81～83は揚げ底である。82の底部には浅い刻みがみられるが、これは底面の縄文を施す際、この部分で縄を強く押しつけて刻んだものである。

本類は北筒Ⅴ式(河野・澤1962)に相当するもので、近年釧路地方ばかりでなく、十勝地方でも類例が増加している。81～83に示した揚げ底の土器があるが、北筒Ⅴ式自体、完形の報告例が少なく、一般的なものかどうかわからない。

#### 8類 (第9図63)

1～7類いずれにも属さないものである。胎土に少量の砂粒を含み焼成は良い。地文は、沈線を境にして、上に複節、下に複々節の縄文が施されている。沈線は、ごく浅いもので地文をすり消す程度のものである。

Ⅱ群土器は、北筒式土器と呼ばれ、漠と、縄文時代中期に位置づけられるものと理解されて

いた。このうち、北筒Ⅳ・Ⅴ式に関しては、早くから後期に降る可能性が示唆されてはいたが(桑原1966)、北筒式土器全体をみると、良好な資料が得られないまま、これまで明解な編年は保留されてきた感があった。しかし、近年、余市式土器との関係から羅臼式以降を後期とする説得力のある考え方が発表され(大沼1981)北筒式土器の編年の再考が迫られている。

### Ⅲ群(第10図・84)

横走る縄文と、斜行縄文が施された薄手の土器である。小片で判然としないが、縄文時代晩期末葉に位置づけられるものと思われる。(工藤研治)

#### 文 献

- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」考古学雑誌 66-4  
 河野広道・澤 四郎 1962「東釧路」 釧路市教育委員会  
 駒井和愛編 1964 「オホーツク海沿岸知床半島の遺跡」上巻  
 桑原 護 1966 「北筒式土器」 考古学雑誌 51-4  
 澤 四郎 1962 「道東における縄文早期土器の編年について」釧路史学創刊号

### 石器(第11図～第15図)

遺構以外から出土した石器はつぎのとおりである。

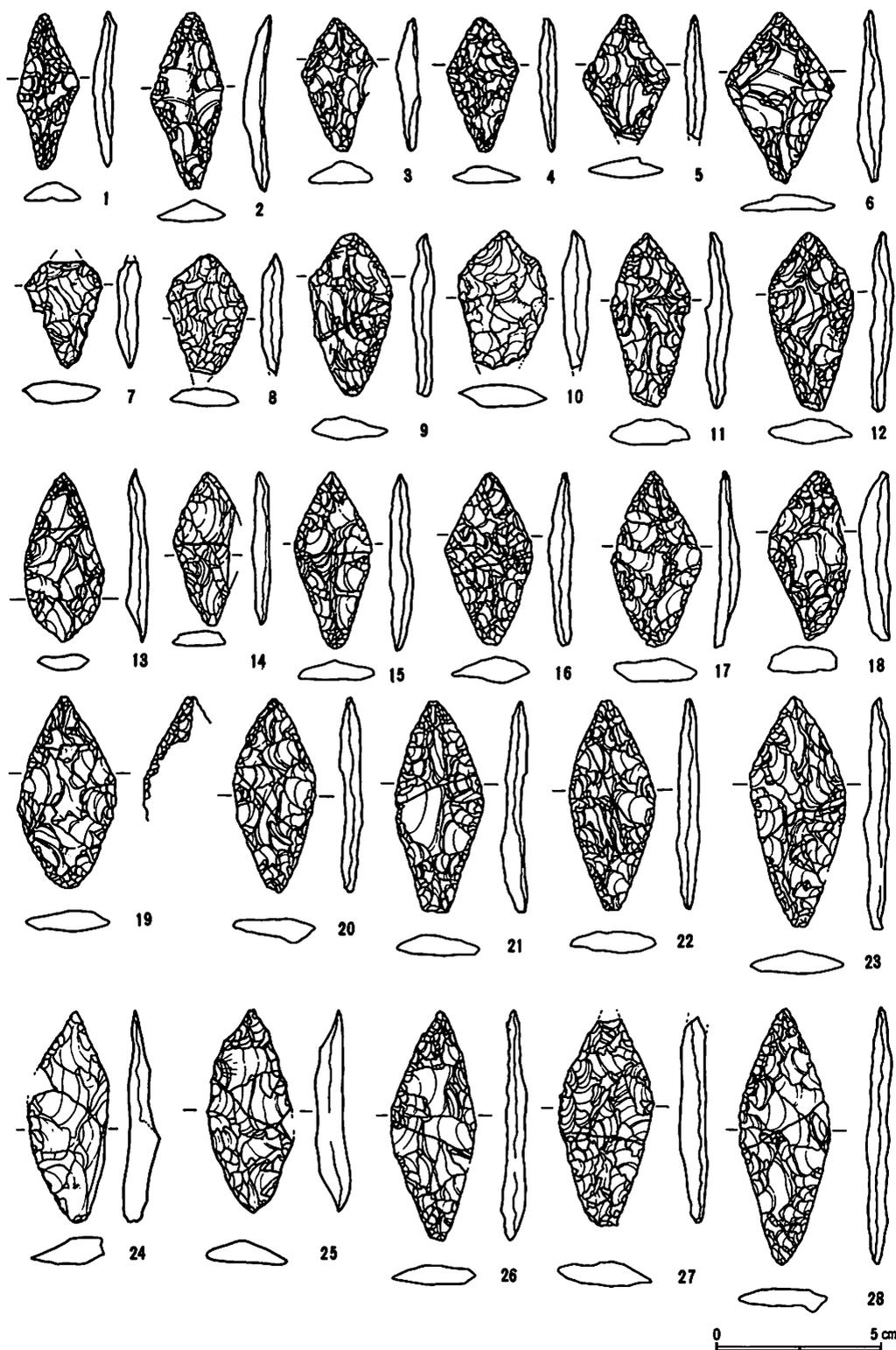
ポイント	321点	すり石	1点
石 鋳	22点	石 皿	3点
刺 突 器	1点	砥 石	1点
ド リ ル	1点	たたき石	1点
ナ イ フ	22点	異形石器	1点
スクレイパー	98点	形状不明	13点
コ ア	7点		

総計492点で、そのうち図示したものは104点である。なお、ポイント、石鋳、スクレイパーについては、図示したもの以外はすべて破片である。石材は特に示さないかぎり黒曜石。

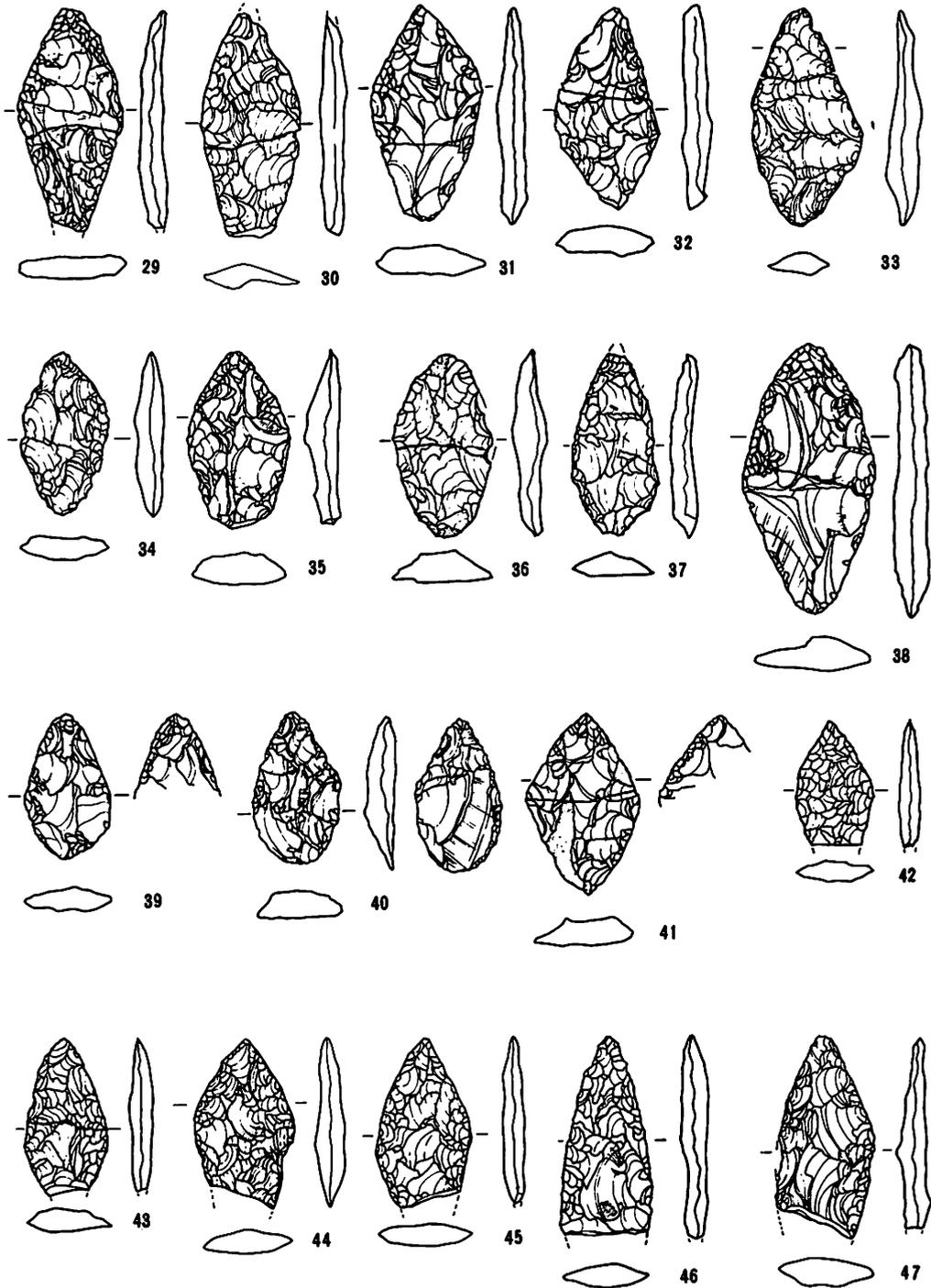
#### ポイント(第11図、第12図)

出土数321点のうち、完形のもの10点、ほぼ完形のもの11点、2個の破片が接合し完形となったもの26点、器体の先端部、基部および中央部で折れた破片が274点である。

最大幅の位置が、器体上位にあるもの(第11図3～12・23、第12図31・35)、中位にあるもの(完全に1/2でないものも含む—第11図1・2・14～18・20～22・24～28、第12図29・30・34・38～47)、下位にあるもの(第11図13・19、第12図32・33・37)に分けることができる。このうち13・39・40は基部がまるくなり、先端部両側縁にのみ細かな加工がなされ、13には、錯向剥離が施されている。42～47は、両面に剥離加工がなされ、いずれも両側縁には細かな加工が施されている。42・44・45は五角形、43・46・47は柳葉形を呈するものと思われる。42～47を除く、各タイプのポイントには、器体中位から先端部にかけて、その側縁にのみ細かな

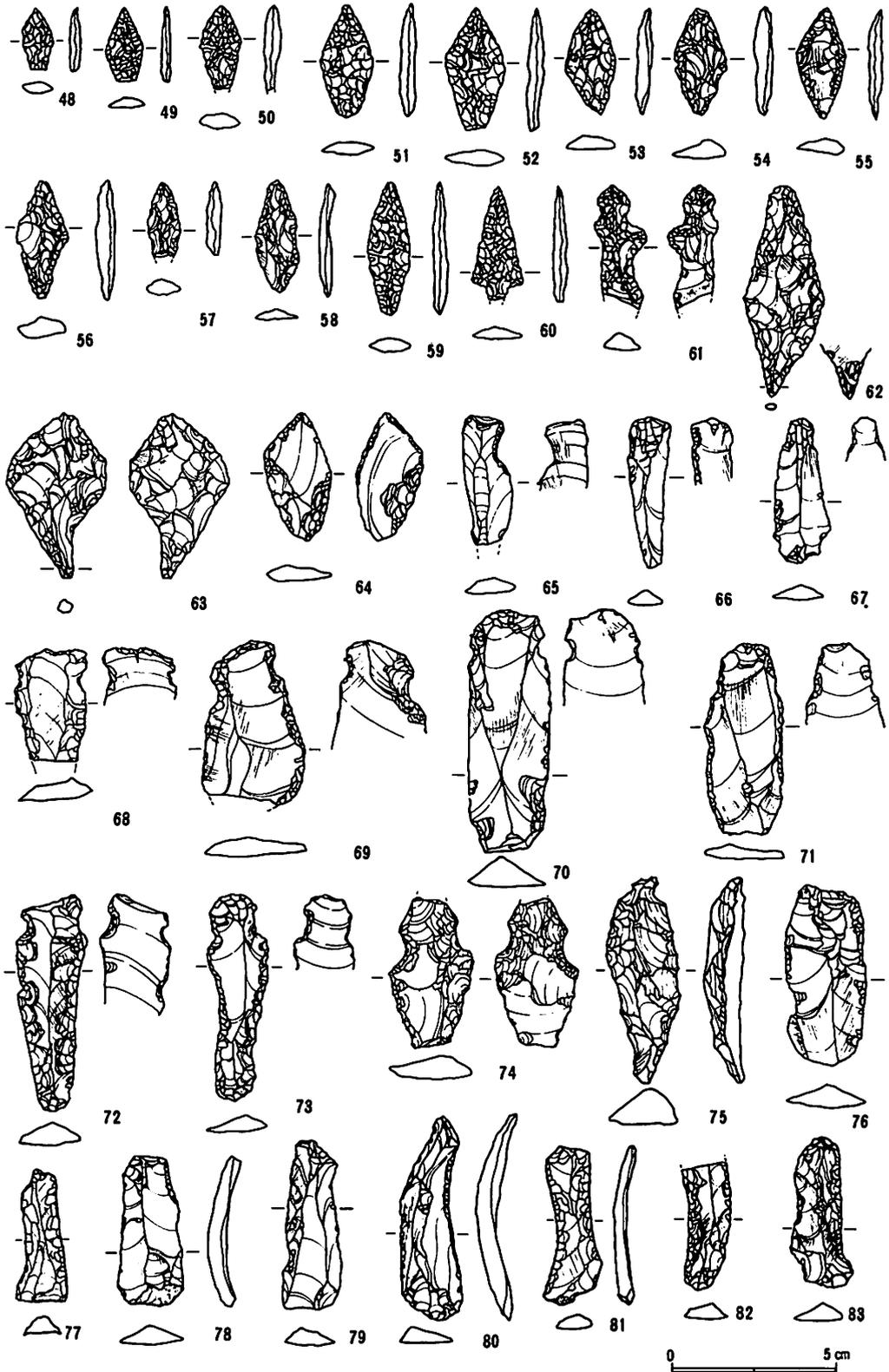


第II図 包含層出土の石器（1）

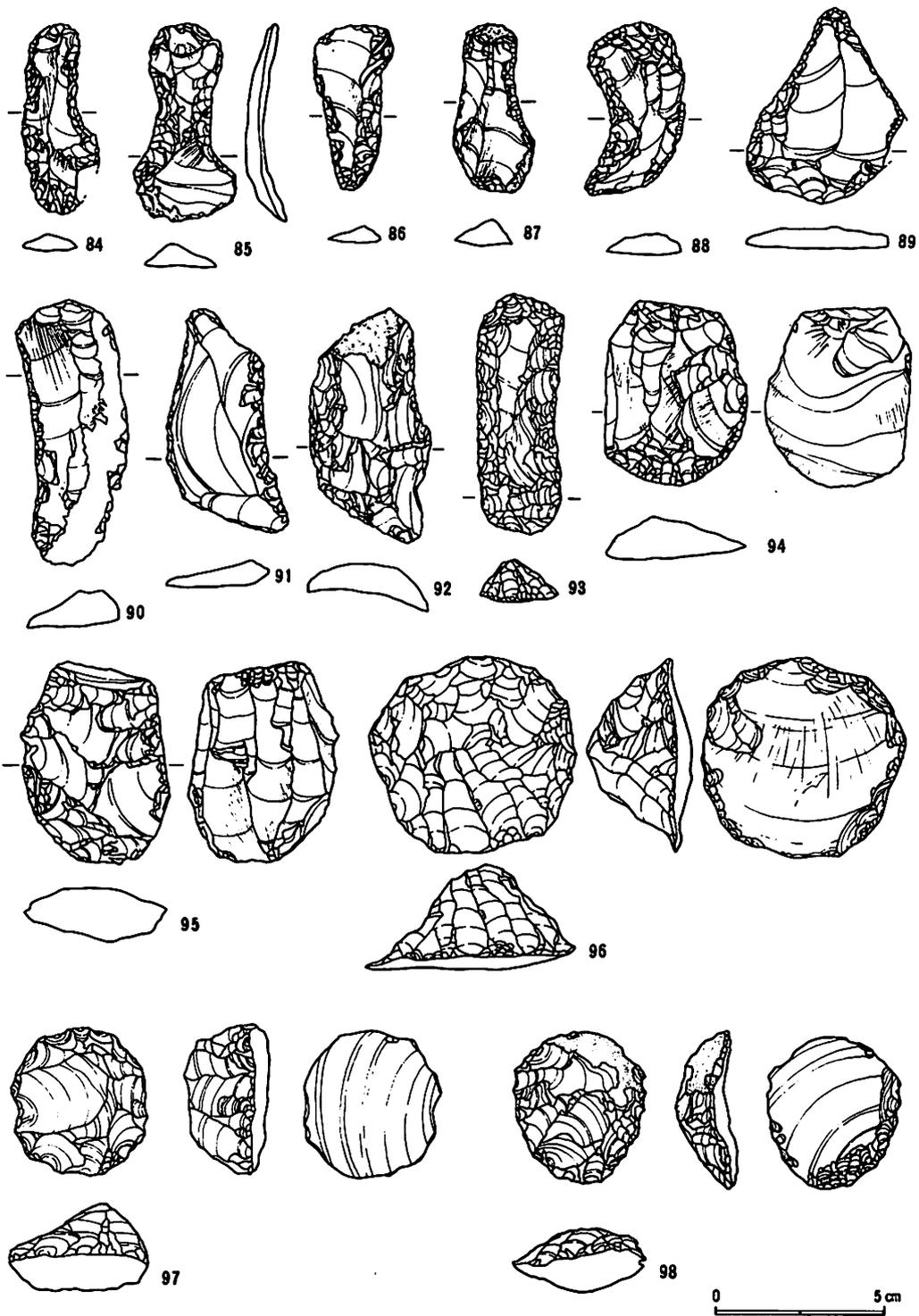


0 5 cm

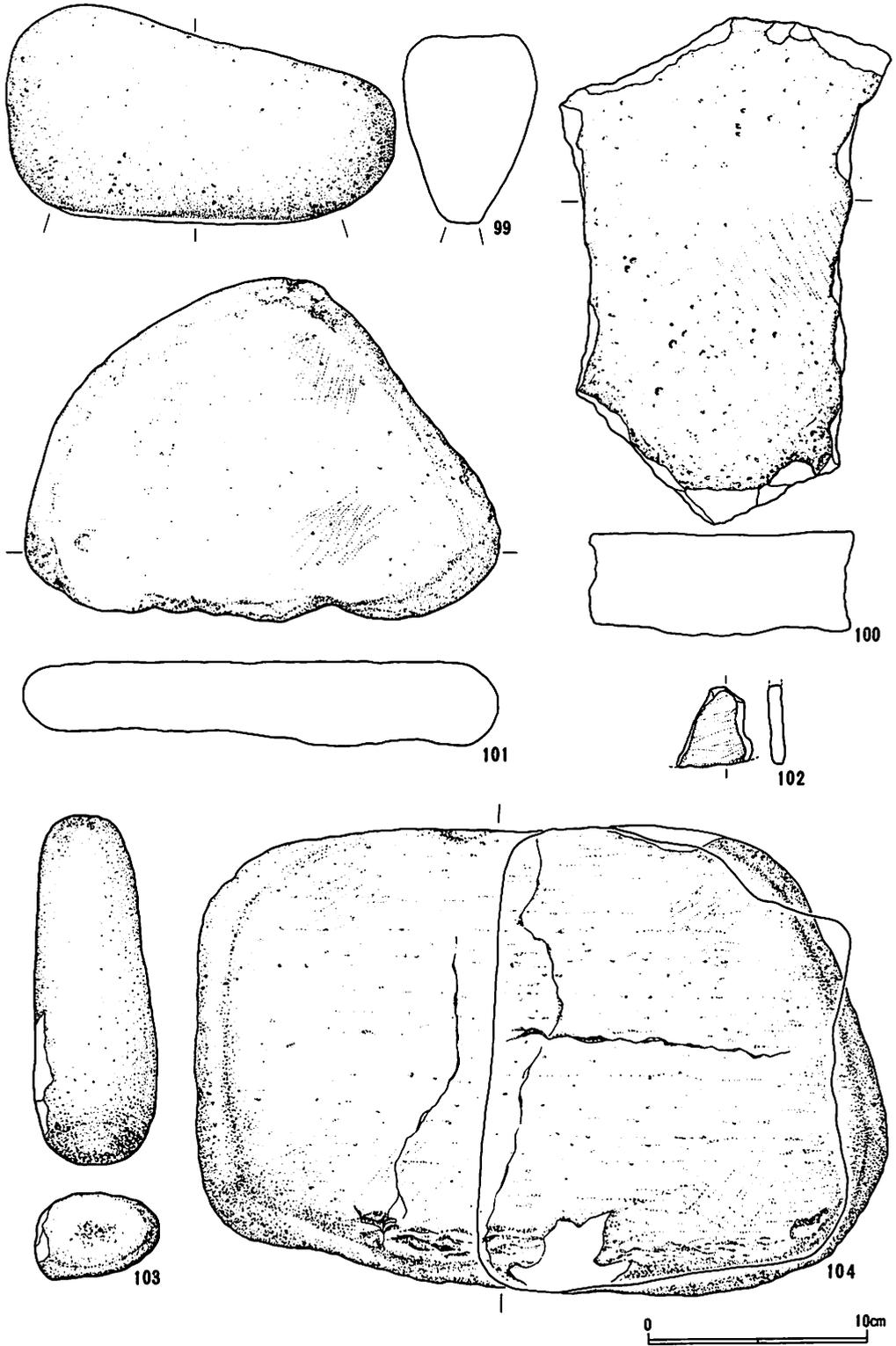
第12図 包含層出土の石器(2)



第13図 包含層出土の石器 (3)



第14図 包含層出土の石器（4）



第15図 包含層出土の石器（5）

調整剥離が施されており、表面に比して、裏面の剥離加工は顕著ではない。

#### 石鏃（第13図48～60）

形状から、五角形（48～52）、ひし形（53～55）、棒状（57・58）、柳葉形（59）、有茎（56・60）の5つのタイプに分けられる。55～58を除いて両面に入念な剥離が施されている。55は、側縁に細かな調整剥離を加えただけのものである。48は熱を受けており器体が灰色になっている。五角形鏃、柳葉形鏃はともに薄身である。

#### 刺突器（第13図62）

縦長剥片が用いられている。表面には剥離加工が施されているが、裏面の加工は先端部のみである。回転磨滅痕がみられず、断面も比較的平らなことから刺突器とした。

#### ドリル（第13図63）

いわゆるつまみをもつタイプのドリル。錐部は棒状になっており細かな加工が施され磨滅痕が認められる。つまみ部の剥離加工は粗雑である。

#### ナイフ（第13図64～79）

切出しナイフのような形状のもの（64）、ブレイド状の剥片を用い、上端にノッチのあるもの（65～74）、ブレイド状の剥片を用いたもの（76～79）、いわゆる石匙と称されるもの（75）の4つのタイプがある。64には、表面の左上側縁および裏面の先端両側縁に細かな加工が施されている。器体下半での剥離加工は、粗雑である。65～74のいずれもつまみ部の作出は顕著でなく、ノッチ部分の剥離も粗い。65～71の刃部の作出は入念になされたものでなく、むしろ剥片の鋭利な部分を利用した結果、部分的に刃こぼれができたものと考えられる。72・73の表面両側縁には比較的粗い剥離が施されている。裏面の剥離加工は顕著でない。74は、表裏面ともに剥離加工は粗雑である。75は比較的厚身の剥片を用いたもので、刃部の加工は粗い。76～79は、ブレイド状の剥片を用いたもので、刃部の状態は65～74のタイプに類似する。

#### スクレイパー（第13図80～83、第14図84～94）

ブレイド状の剥片を用いたもの（80～88・90）、剥片の側縁に剥離加工を施した不定形なもの（89・91・92）、エンドスクレイパー（93・94）などがある。ブレイド状の剥片を用いたものは、剥離加工が片方にかたよっているものが多く、刃部が緩くコンケイブしたものもある（81～83・88・90）。また、側縁の一部に細かな加工がなされるものもある（80・86・87）。93は、両側縁にも入念な加工が施されている。

#### コア（第14図95～98）

95は扁平で片面のみに剥離痕があるもの。96～98は円錐形を呈するものである。96は剥片剥離後、裏面に調整が加えられている。98の裏面の一部に剥離加工が施されており、ラウンドスクレイパーとしての機能も考えられる。

#### 異形石器（第13図61）

全体の形状を推定しがたい。表裏面に剥離加工が施されており、ノッチ部分の加工は細かく入念である。

すり石 (第 15 図 99)

すり面の幅はせまく、断面は三角形に近い。すり面はかなり磨滅している。安山岩製。

石皿 (第 15 図 100・101・104)

いずれも使用面が磨滅しており平坦である。100 は裏面が剥落したものであるが、104 と同じタイプのものと思われる。3 点とも安山岩製。

砥石 (第 15 図 102)

表裏面および側縁がかなり磨滅している。砂岩製。

たたき石 (第 15 図 103)

棒状のもので、下端に使用痕がみられる。安山岩製。

さて、今回の調査で出土した石器のうち、ポイントが約 65% を占めている。前述のとおり、ポイントの形態には、幾種類かのものであるが、第 12 図 42~47 に示す整った両面加工のグループを除けば、一般に表面に対して裏面の剥離加工が粗雑である。この傾向は、最大幅が上位または中位にあるものについて著しい。先端部の細部調整、刃部の再生痕および使用痕などが、どちらかの片方の面に偏っているものが多い。また、錯向剥離が施されているものもある。このようなことから、これらのポイントの大部分は、槍というよりはむしろナイフとしての機能が考えられるのではなかろうか。

また、これらのポイントは破損しているものが非常に多い。完形のもの 21 点であるが、破片の数は接合した 26 例 52 点を加えると 326 点に及び、完形品の占める割合はわずか 6% 強である。これらのポイントの破損の部位および断面の形状を模式的に表すと、第 16 図のようになる。(図中の白抜きが欠損部分)。下に掲げる表は、形状の推定できない細片 11 点を除く各タイプの出現頻度である。なお、断面の肉眼的観察では、直接的な鋭い打撃によると認められるものは少なく大部分のものは、折り曲げあるいはねじりの圧力によって破損したと思われる。

先端部または中位で、長軸に対して直角に近く折れているタイプ 1 および 2 は、161 点で全体の 50% を超え、先端側破片 108 に対して、基部側破片 53 である。一方、基部付近で折れたタイプ 3 は 84 点で 27% を占め、先端側 24 点に対して基部側 60 点である。なにゆえに、このような欠損部位の違いが生じたのかわからないが、あるいは、使用方法または着柄の状態に由来する

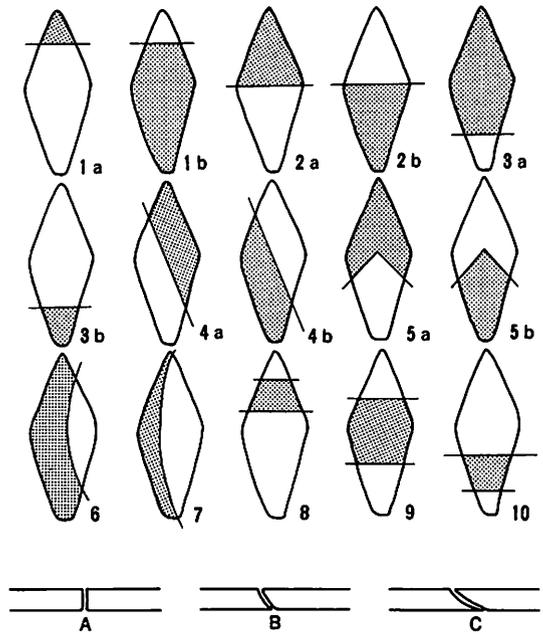
ポイントの折れ方頻度表

折れ方 断面	1		2		3		4		5		6	7	8	9	10	計
	a	b	a	b	a	b	a	b	a	b						
A	22(4)	9(4)	58(7)	25(7)	19(2)	44(2)	5(1)	4(1)	4	2			2	2	1	197(20)
B	10(1)	5(1)	10(6)	8(6)	4	11	14(2)	9(2)	2	3		1	1		1	79(10)
C	2	1	6(1)	5(1)	1	5	9(2)	6(2)	2		1			1		39(6)
計	34(5)	15(5)	74(14)	38(14)	24(2)	60(2)	28(5)	19(5)	8	5	1	1	3	3	2	315(52)

注 ( ) 内は接合破片数

ものであるかもしれない。また、タイプ1・2・3の断面の角度は、直角に近いものが72%を占め、多くが折り曲げの圧力によって破損したものと推測される。斜めに折れているタイプ4では先端側と基部側の破片数は28:19で、その差はあまり顕著でない。しかし、断面の角度は逆に鋭角のものが多く、これがねじりの圧力によるものとするれば、肉眼的所見とも一致する。

以上、本遺跡で最も特徴的なポイントの破損部位および断面の状態について若干の分析を試みた。しかし、実験例も乏しく、折れ方によってポイントの機能、着柄状態、使用方法などを導き出すにはまだまだ困難なことと思われるが、このような分析が今後の石器研究の一つの課題となるであろう。(矢吹俊男)



第16図 ポイント破損部位および断面模式図

掲載石器一覧表

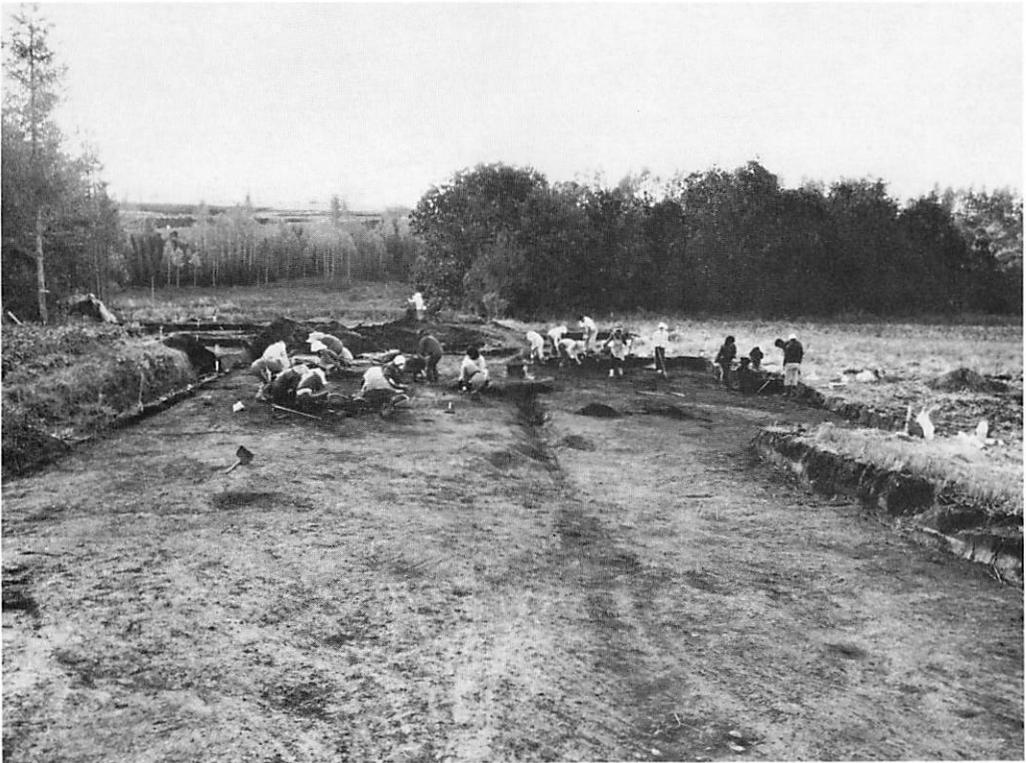
番号	分類	発掘区	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考	番号	分類	発掘区	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
1	ポイント	F-22	4.7	1.8	2.9		19	ポイント	D-19・C-20	6.0	2.8	9.2	接合
2	"	F-22	5.3	2.1	5.3		20	"	E-16	5.7	2.5	7.7	接合
3	"	F-21	4.0	(2.1)	(4.0)		21	"	C-19	6.2	2.5	8.5	接合
4	"	C-22	4.0	2.1	3.1		22	"	C-19	6.3	2.5	8.5	接合
5	"	B-20	(3.7)	2.6	(4.3)		23	"	C-19	6.9	2.8	(10.9)	接合
6	"	F-21	5.1	3.2	7.9		24	"	C-19	6.2	2.4	(8.5)	接合
7	"	B-15	(3.2)	2.2	(3.5)		25	"	B-15	6.0	2.3	(10.7)	接合
8	"	B-20	(3.6)	2.3	(4.5)		26	"	C-19	6.9	2.5	(8.1)	接合
9	"	C-18・D-17	4.5	2.4	6.8	接合	27	"	C-20	(6.0)	2.8	(11.0)	接合
10	"	C-19	(4.1)	2.7	(7.5)		28	"	C-19	7.6	2.7	10.9	接合
11	"	F-24	5.2	2.4	7.2		29	"	C-19	(6.2)	3.2	(12.1)	接合
12	"	C-19	6.3	2.6	7.6	接合	30	"	C-19	(6.4)	2.9	(11.1)	接合
13	"	F-24・E-23	5.0	2.4	5.8	接合	31	"	C-19	6.2	3.1	13.2	接合
14	"	E-18	4.5	(1.7)	(3.3)	接合	32	"	C-19	5.7	3.0	10.8	接合
15	"	C-19	5.3	2.3	5.5	接合	33	"	C-19	6.1	3.1	15.7	接合
16	"	F-14	5.2	2.6	7.0	接合	34	"	F-24	5.6	2.5	7.4	
17	"	C-19	5.7	2.9	7.2	接合	35	"	C-19	(5.1)	2.9	(12.5)	
18	"	E-24	5.0	(2.3)	(8.6)		36	"	E-18	5.2	(2.8)	(10.5)	接合

番号	分類	発掘区	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考	番号	分類	発掘区	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
37	ポイント	表採	(5.6)	2.4	(7.8)		71	ナイフ	E-20	5.7	2.3	5.5	
38	"	E-18	7.7	3.9	26.2	接合	72	"	表採	6.5	2.1	7.4	
39	"	E-23	4.1	2.4	5.0		73	"	F-24	6.2	1.9	4.9	
40	"	E-17	4.3	2.5	8.0		74	"	B-21	(4.5)	3.6	(6.6)	
41	"	E-18, D-17	5.0	3.2	11.6	接合	75	"	F-24	6.2	2.0	10.9	
42	"	E-23	(3.5)	2.2	(3.9)		76	スクレ イパー	E-20	5.4	2.4	7.3	
43	"	E-23	(4.4)	2.3	(6.4)	接合	77	"	D-11	4.0	1.5	2.3	
44	"	C-19	(4.8)	2.9	(9.3)		78	"	E-20	5.5	2.0	4.7	
45	"	C-19	(4.8)	2.8	(7.6)		79	"	E-20	5.1	1.8	4.0	
46	"	E-23	(6.5)	2.6	(9.6)		80	"	E-19	6.0	1.8	5.7	
47	"	D-23	(5.8)	2.7	(11.4)		81	"	C-18	4.8	1.5	3.1	
48	石 鐵	E-21	1.9	1.0	0.5	熱を受 けている	82	"	C-19	(3.4)	1.3	(2.6)	
49	"	E-24	2.2	1.0	0.6		83	"	B-20	4.5	1.5	3.8	
50	"	E-18	(2.5)	1.2	(0.7)		84	"	E-18	5.6	(2.2)	(5.6)	
51	"	C-19	3.4	1.6	2.0		85	"	F-20	5.8	3.0	8.5	
52	"	E-23	3.7	1.8	2.5		86	"	E-23	4.9	2.5	5.5	
53	"	C-18	3.2	1.5	1.7		87	"	E-23	5.0	2.4	7.5	
54	"	E-14	3.2	1.6	2.2		88	"	C-18	5.2	2.8	9.3	
55	"	C-18	3.4	1.5	1.6		89	"	E-23	5.7	(3.9)	(14.6)	
56	"	B-22	3.5	1.5	2.2		90	"	E-22	7.8	2.8	24.8	
57	"	E-21	(2.2)	1.0	(0.9)		91	"	F-24	6.8	2.9	15.5	
58	"	E-20	3.4	1.2	1.2		92	"	E-23	6.8	3.2	21.9	
59	"	B-23	4.1	1.3	1.8		93	"	C-20	6.9	2.5	19.0	
60	"	E-14	(3.4)	1.5	(1.3)		94	"	E-22	5.4	4.1	30.2	
61	異形石器	E-23	(4.8)	1.5	(2.2)		95	コ ア	F-21	6.2	4.3	43.8	
62	刺突器	F-22	6.4	2.4	10.9		96	"	F-22	6.0	5.7	78.3	
63	ドリル	C-19	(5.0)	3.0	(11.4)		97	"	E-23	3.9	3.5	33.0	
64	ナイフ	F-21	3.8	2.0	3.0		98	"	表採	4.4	3.9	20.5	
65	"	E-18	(3.9)	1.4	(2.3)		99	すり石	C-19	16.3	8.1	1580	
66	"	C-19	5.5	1.1	2.1		100	石 皿	不明	22.3	(13.6)	(2200)	
67	"	E-18	4.3	1.8	2.7		101	"	E-23	21.3	15.7	1940	
68	"	C-19	(3.4)	2.1	(4.2)		102	砥 石	E-22	(3.7)	(3.5)	(7.7)	
69	"	F-24	(4.8)	3.0	(8.0)		103	たつき石	D-19	15.6	5.4	580	
70	"	F-21	7.3	2.5	13.6		104	石 皿	E-19	30.7	20.5	1740	

# 写真図版

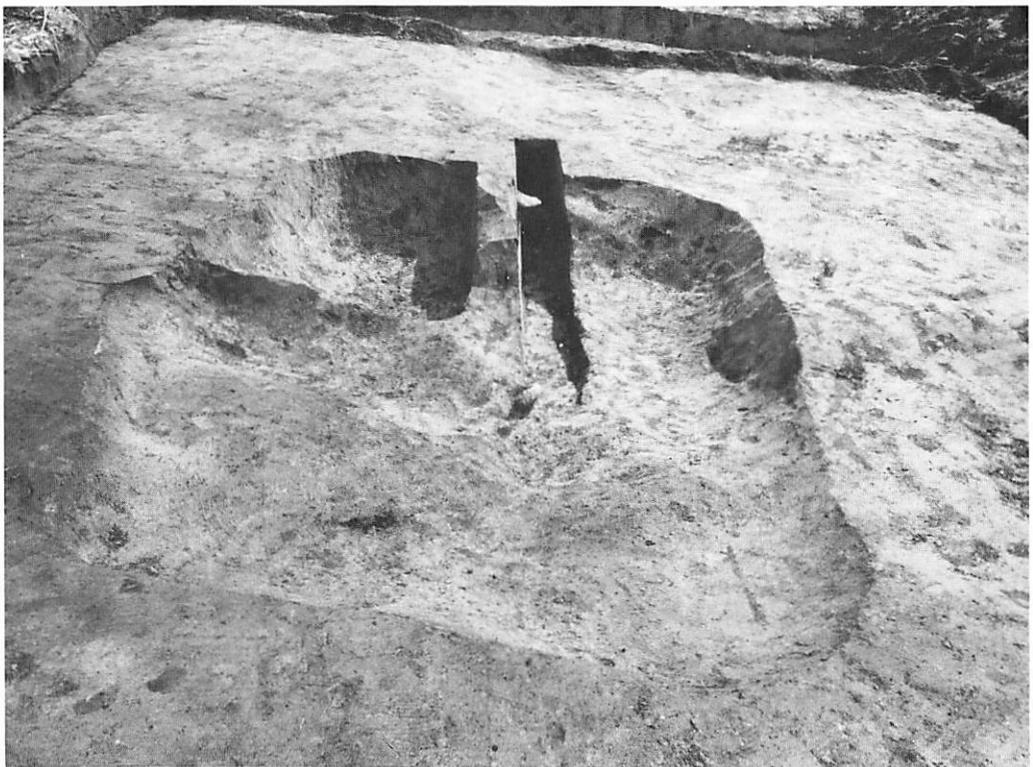
## 目次

- 第1図版 1) 調査地区全景 (発掘前)  
2) 発掘調査状況
- 第2図版 1) P-1・覆土の状態  
2) P-1
- 第3図版 1) P-2  
2) 包含層出土の土器 (II群3類)
- 第4図版 包含層出土の土器 (I群)
- 第5図版 包含層出土の土器 (I群)
- 第6図版 包含層出土の土器 (II群)
- 第7図版 包含層出土の土器 (II群・III群)
- 第8図版 包含層出土の石器 (ポイント)
- 第9図版 包含層出土の石器 (石鏃・ナイフ等)



第1図版 1) 調査地区全景 (発掘前)

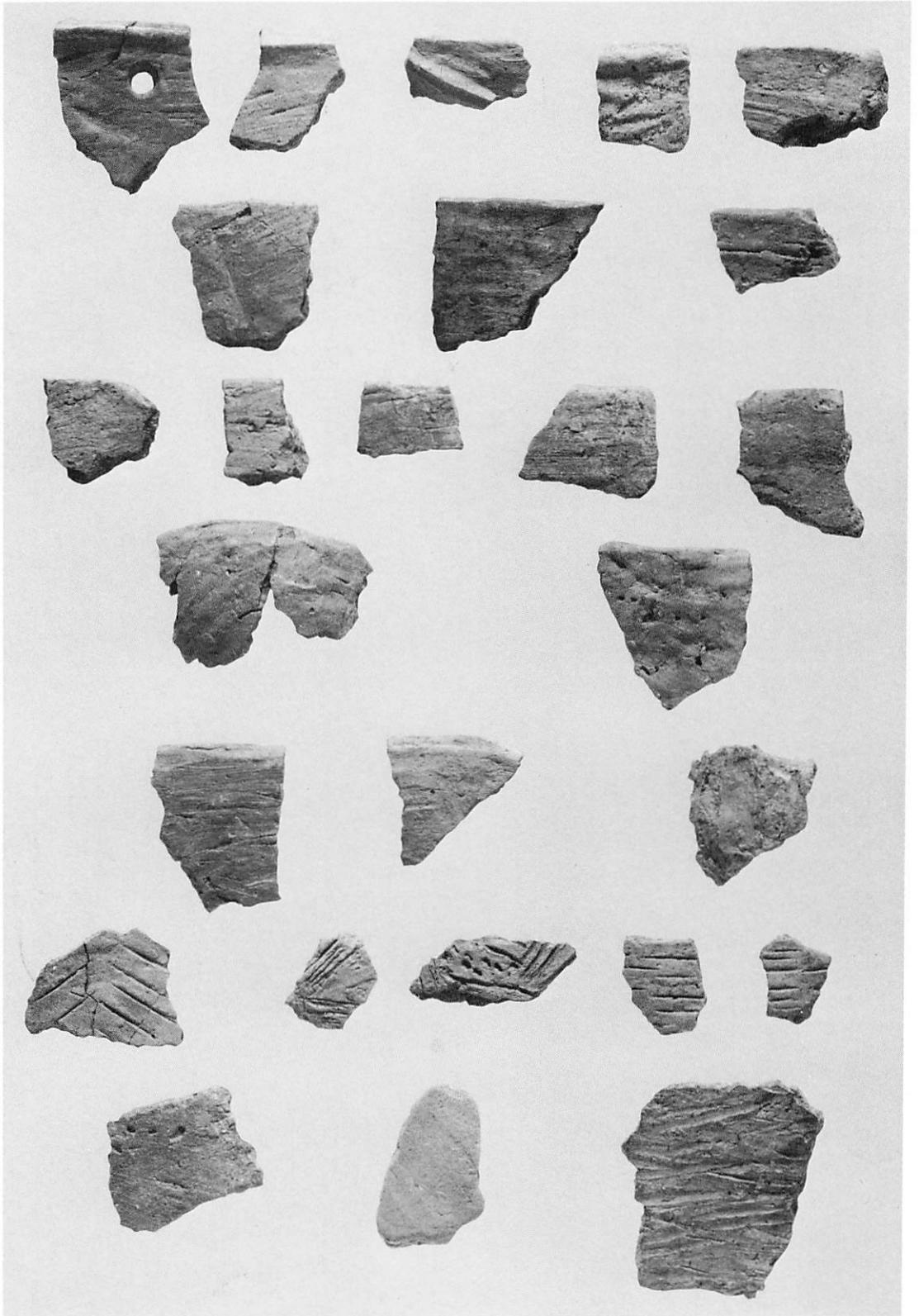
2) 発掘調査状況



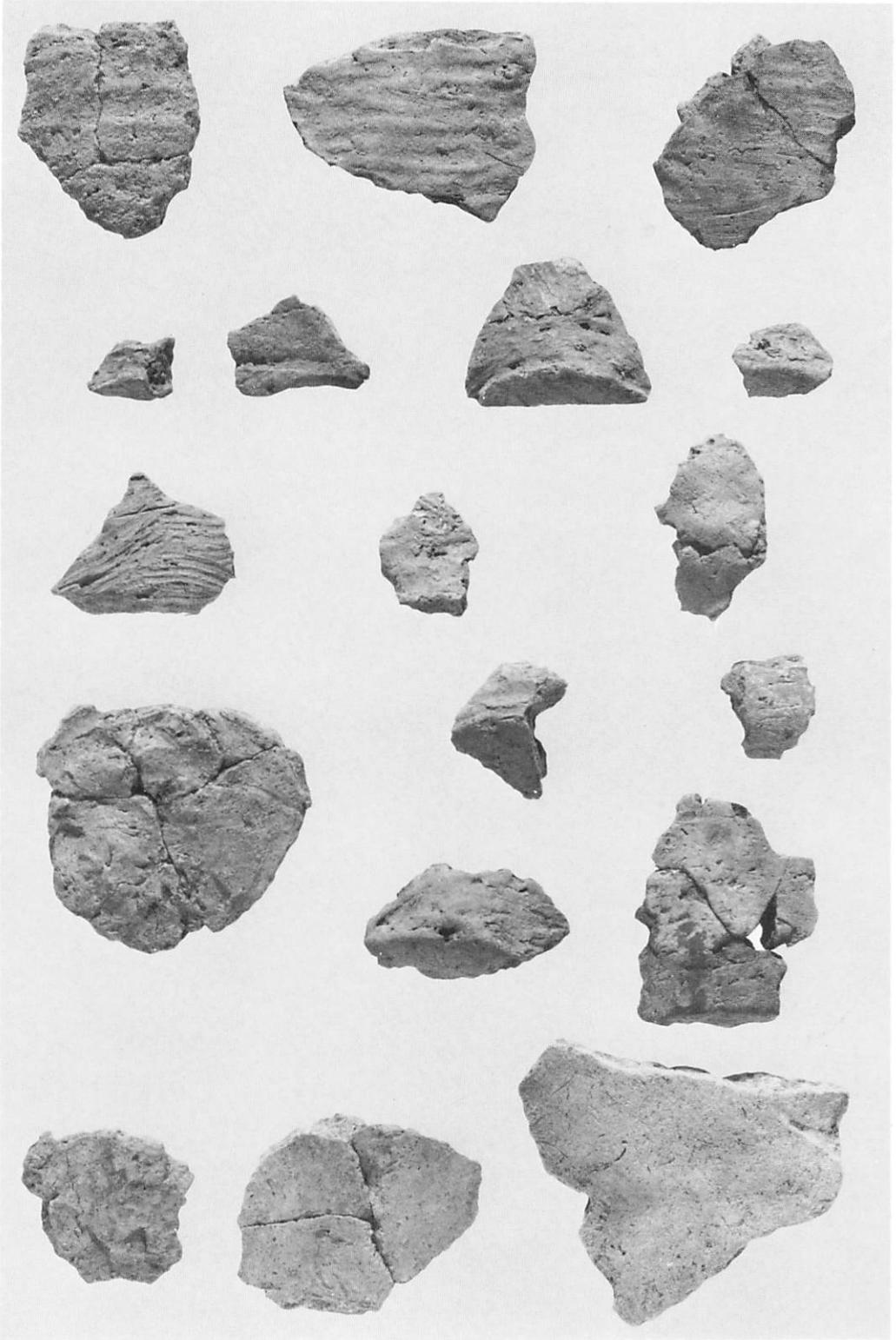
第2図版 1) P-1・覆土の状態 2) P-1



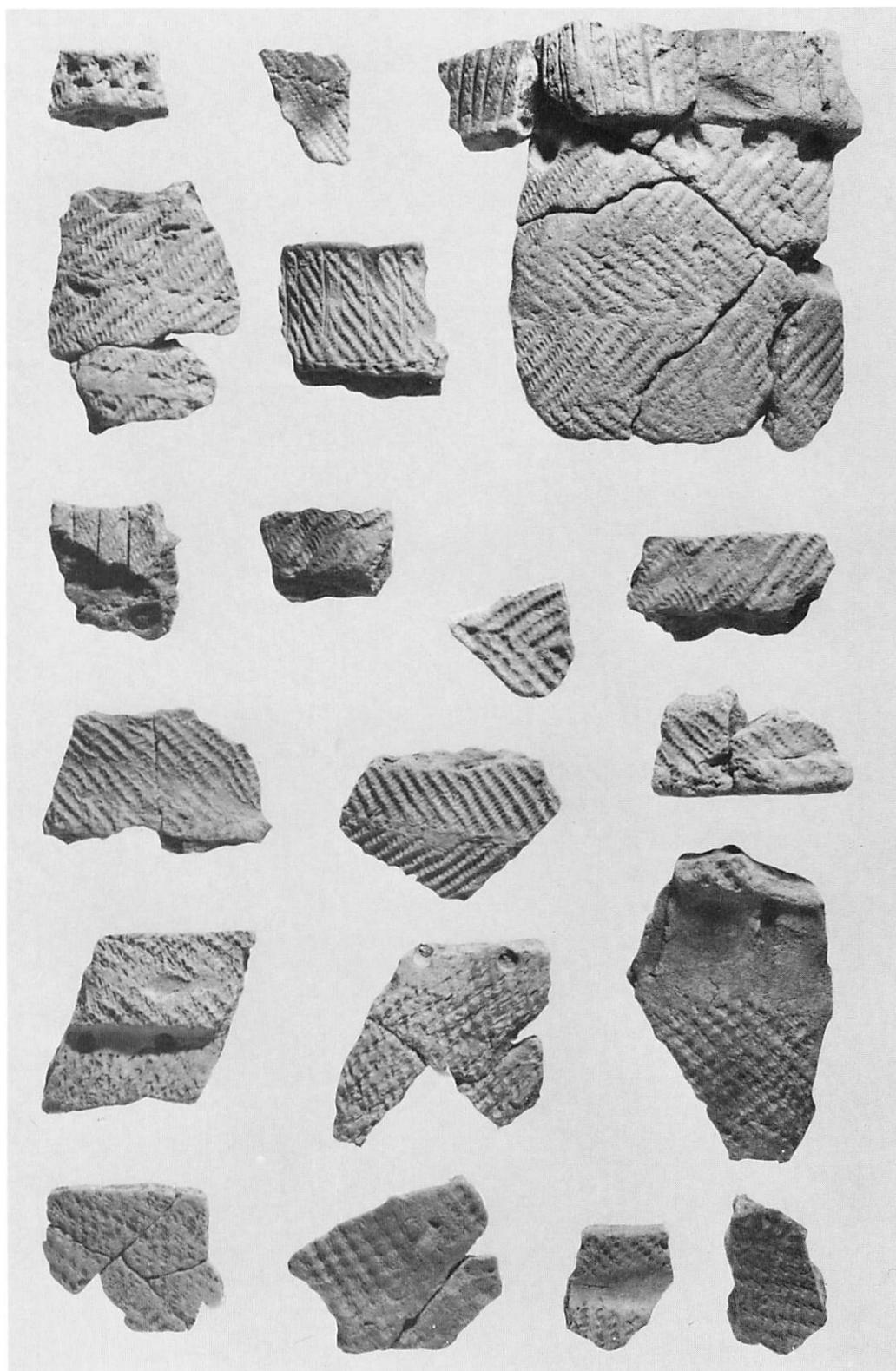
第3図版 1) P-2 2) 包含層出土の土器 (II群3類)



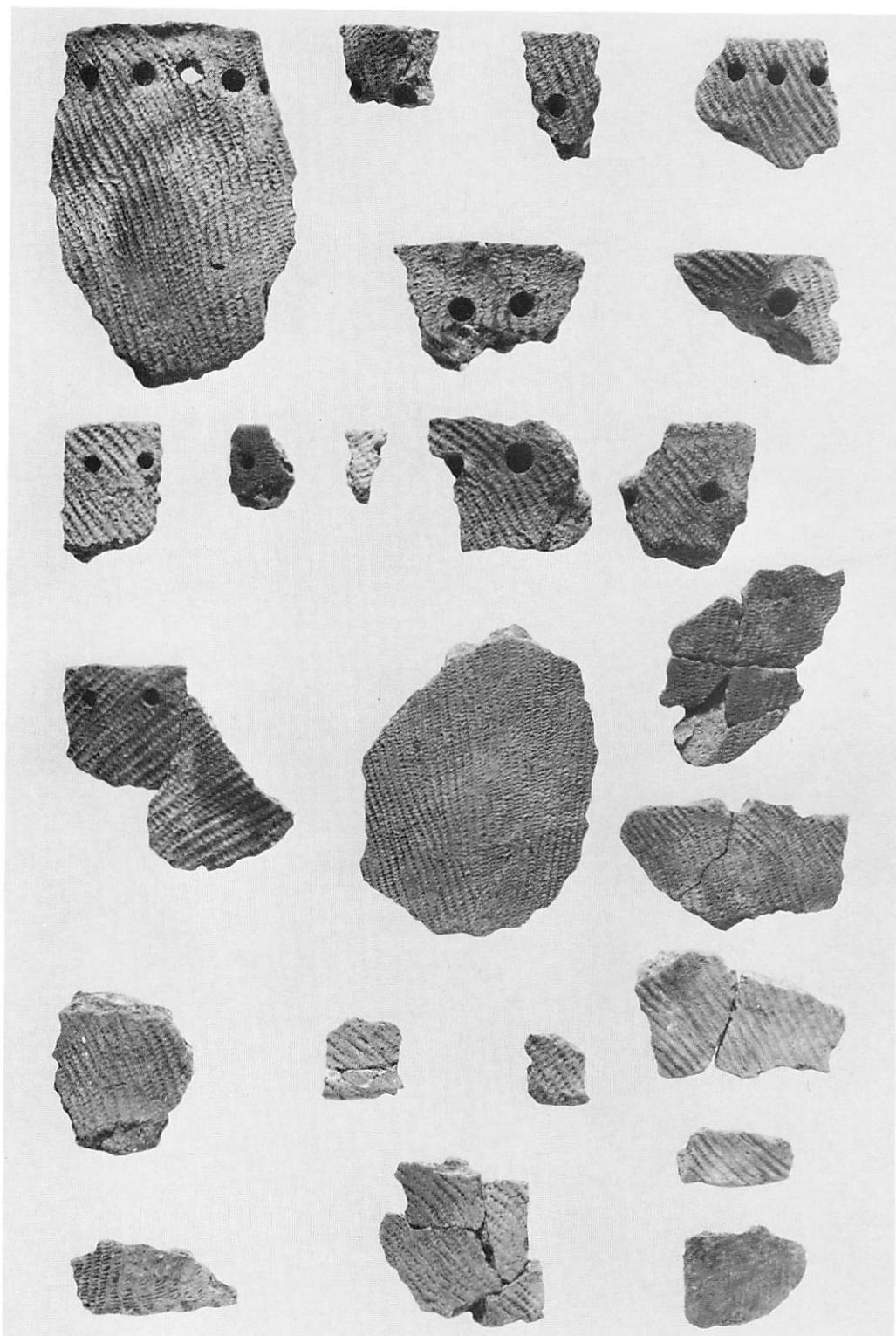
第4図版 包含層出土の土器（I群）



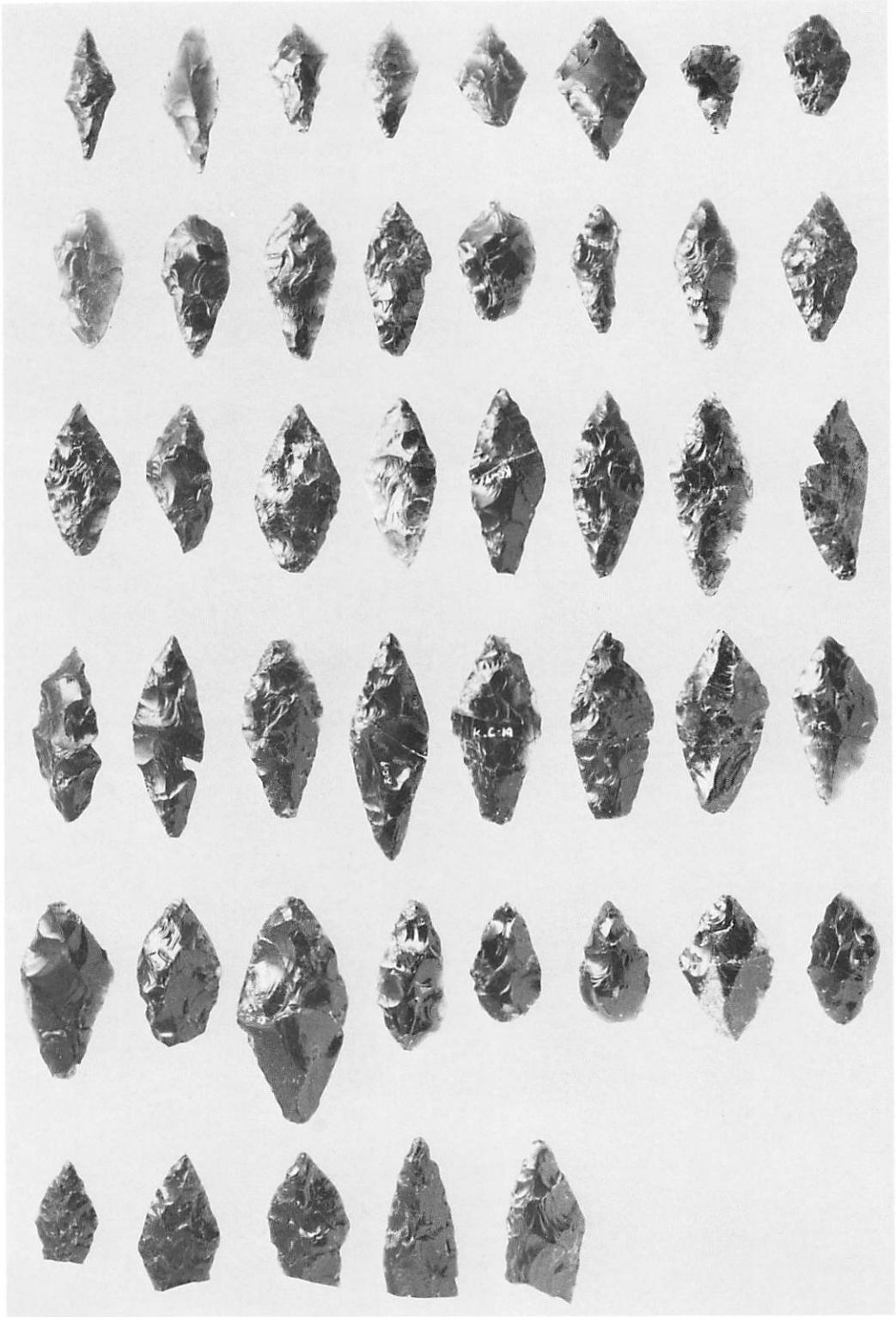
第5図版 包含層出土の土器（I群）



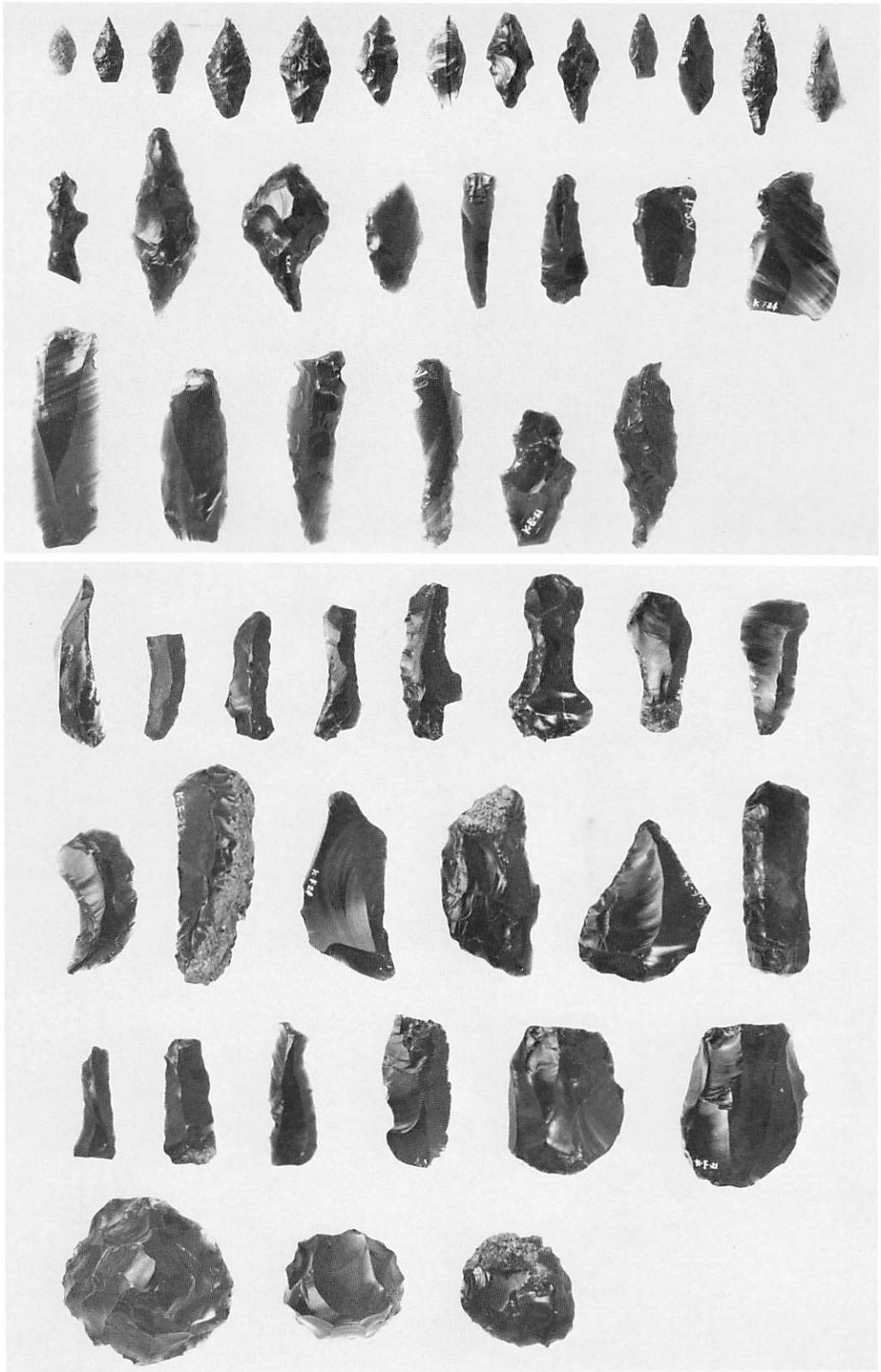
第6図版 包含層出土の土器（Ⅱ群）



第7図版 包含層出土の土器（Ⅱ群およびⅢ群）



第8図版 包含層出土の石器（ポイント）



第9図版 包含層出土の石器（石鏃・ナイフ等）

---

---

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第6集

友 進 遺 跡

—— 国営畑地帯総合土地改良

パイロット事業の内鹿追地区A～14号道路

工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和57年3月25日発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南15条西17丁目

TEL. (011)561-0067

印 刷 (協) 高 速 印 刷 セ ン タ ー

061-24 札幌市西区手稲稲穂472

TEL. (011)683-2231

---

---

